

独立棟持柱建物と祖霊祭祀

Buildings with Freestanding Munamochibashira and Ancestor Ritual

設楽博己

SHITARA Hiromi

- ①視点
- ②分類
- ③特質
- ④墓とのかかわり
- ⑤独立棟持柱建物の役割
- ⑥成果と課題

【論文要旨】

独立棟持柱建物は、Ⅰ類) 居住域に伴う場合と、Ⅱ類) 墓域に伴う場合がある。Ⅰ類にはA類) 竪穴住居と混在する、B類) 特定の場所を占める、C類) 区画に伴う、という三つのパターンがある。A類からC類への流れは、共同体的施設から首長居館の施設への変貌を示すもので、古墳時代へと溝や塀で囲まれ秘儀的性格を強めて首長に独占されていった。弥生土器などの絵画に描かれた独立棟持柱建物の特殊な装飾、柱穴などから出土した遺物からすると、この種の建物に祭殿としての役割があったことは間違いない。問題は祭儀の内容だが、Ⅱ類にそれを解く手がかりがある。

北部九州地方では、弥生中期初頭から宗廟的性格をもつ大型建物が墓域に伴う。中期後半になると、楽浪郡を通じた漢文化の影響により、大型建物は王権形成に不可欠な祖霊祭祀の役割を強めた。福岡県平原遺跡1号墓は、墓坑上に祖霊祭祀のための独立棟持柱建物がある。建物は本州・四国型であるので、近畿地方から導入されたと考えられる。したがって、近畿地方の独立棟持柱建物には、祖霊祭祀の施設としての役割があったとみなせる。

ところが、近畿地方でこの種の建物は墓に伴わない。近畿地方では祖霊を居住域の独立棟持柱建物に招いて祭ったのであり、王権の形成が未熟な弥生中期の近畿地方では、墳墓で祖霊を祭ることはなかった。しかし、弥生後期末の奈良県ホケノ山墳丘墓の墓坑上には独立棟持柱建物が建っている。畿内地方の王権形成期に、北部九州からいわば逆輸入されたのである。南関東地方のこの種の建物も祖霊祭祀の役割をもつが、それは在地の伝統を引いていた。独立棟持柱建物の役割の一つは祖霊祭祀であるという点で共通している一方、その系譜や展開は縄文文化の伝統、漢文化との関係、王権の位相などに応じて三地域で三様だった。

【キーワード】 弥生時代、集落、独立棟持柱建物、方形周溝墓、祖霊祭祀、漢文化

①……………視点

独立棟持柱をもつ掘立柱建物が注目されたのは、1991年、弥生時代の掘立柱建物をテーマとした埋蔵文化財研究集会において、宮本長二郎がその性格を叙述したことに端を発する。宮本はそのなかで、神社建築との類似性や弥生土器や銅鐸に描かれていることなどから、この建築物がのちの神殿につながる特殊な性格をもった建物であることを指摘した〔宮本1991：46〕。

その後、大阪府池上曾根遺跡の発掘調査で巨大な掘立柱建物がこの種の建築様式をもっていることがわかり、その一つの柱の伐採年代が年輪年代測定によって紀元前52年であることも確認された。それが弥生時代の年代観の見直しに貢献したこととあいまって、独立棟持柱建物の特異性が広く認識されるようになった。金関恕や広瀬和雄は、この建築物が神殿であるとの説を提示したが、それについては岡田精司らによる反論もあり決着はついていない。独立棟持柱建物の性格をめぐっては、多方面から追究していかなくてはならない。

1991年の研究集会では、集落における掘立柱建物と竪穴住居跡の共存関係に注意が払われた。この視点は、独立棟持柱建物の性格を理解するうえで継承すべきである。さらに、見過ごされがちなのは墓との関係性である。広瀬和雄は弥生時代の墓の上に築かれたこの種の建物をとりあげ、前方後円墳とのつながりを論じた。独立棟持柱建物を神殿とみなす広瀬は、墳墓上のこの建物が亡き首長を神と化すための施設であるとする〔広瀬2008：14〕。小林青樹と筆者は南関東地方の独立棟持柱建物導入の経緯を分析し、この建物がそれ以前に営まれていた再葬墓の伝統を引いていた可能性を論じた〔小林2003・設楽2004〕。つまり、南関東地方ではこの種の建物は墓とかかわりをもっていることを予察した。本稿ではこれらの論考を踏まえ、さらに目を近畿地方から九州地方、中国大陸に広げて、独立棟持柱建物の性格を捉え直す。

②……………分類

(1) 分類の方法

まず、独立棟持柱建物の名称と定義だが、通常、「独立棟持柱をもつ掘立柱建物」と呼称される。しかし、文中繰り返し出てくるので煩雑であることと、分析の対象を掘立柱建物に限ることから、「独立棟持柱建物」と略称しておく。

棟持柱とは、「建物の妻側側面から離れて柱を立てて切妻屋根先端の棟木を地面から直接支持する」ものである〔宮本1991：45〕。棟持柱には、両方の妻側柱筋から外に大きく飛び出た独立棟持柱のほかに、片側だけにあるものや、妻側中央に柱1～2本分ほど外にはずれた「近接棟持柱」と呼ばれる構造のものがある。宮本長二郎が指摘するように、出雲大社本殿は近接棟持柱構造であり、神社建築とのかかわりからすればこれも重要であることは疑いないが〔前掲：47〕、通常の掘立柱建物でたまたま棟持柱がややずれているものとの区別がつきにくい。そこで本稿では、両側に棟持柱をもち、その掘り方が梁のラインよりも外に飛び出た典型的な独立棟持柱建物だけを扱うことに

する。

独立棟持柱をもつ掘立柱建物の集落におけるあり方を分類すると、まず、Ⅰ類) 居住域に存在しているのか、Ⅱ類) 墓域あるいは墓に存在しているのかで、大きく二分される。

居住域に存在しているものでも、他の遺構とのかかわりをみた場合、A類) 竪穴住居と混在している、B類) 他の掘立柱建物とともに、あるいは単独で竪穴住居群から独立して存在している、C類) 方形区画の中や外側に存在している、という三つのパターンをとっている。B・C類の場合、非日常的な空間を構成している可能性もあるので、単純に居住域とはいえないかもしれないが、墓域に伴わないことを重視してここに入れておく。

墓域あるいは墓に存在している場合では、A類) 墓域の一角に建っている場合と、B類) 墓の上に築かれている場合の二つが指摘できる。それぞれについて代表的な事例に目を通していくが、詳しい内容は一覧表(表1)を参照願うことにする。古墳時代に入る可能性のある庄内式とそれに併行する時期の独立棟持柱建物の集成は不十分である。

(2) 居住域に存在する場合

【A類】

神奈川県中里遺跡(図1) 中期中葉。竪穴住居数棟を単位としたいくつかの住居群からなる集落で、住居群の間に独立棟持柱建物が2棟建てられている。その建物のうち1棟は7×2間、46.2㎡と大型に近く、もう1棟も完全に発掘されていないがそれに匹敵する大きさをもつ。いずれも同一地点で2回建て替えられている。

徳島県桜ノ岡遺跡(図2) 中期後半。竪穴住居数棟に囲まれた箇所位置する1×1間の小型独立棟持柱建物。別の掘立柱建物1棟と並存している。柱穴4本には、柱抜き取りの後、多量の土器破片を積み重ねており、廃屋祭祀の痕跡が明瞭である。

鳥取県茶畑第1遺跡 中期後半。6×2間、30㎡の中型独立棟持柱建物が、竪穴住居が取り巻く中に1棟存在している。この空間には掘立柱建物が集中するが、そのなかでもひとときわ大きい。中期後半～終末には、別の独立棟持柱建物が建てられた。布掘り桁であり、前者とは趣を異にしているが、同じ掘立柱建物集中区の片隅に位置する。

兵庫県有鼻遺跡(図3) 中期後半。竪穴住居からなる高地性集落で、竪穴住居に囲まれた最も標高の高い位置に独立棟持柱建物が位置する。小型の掘立柱建物と重複する。

三重県筋違遺跡^{すじかい} 前期前半。環壕集落。環壕の内側の壕付近に独立棟持柱建物が存在している。4×2間で7.8㎡の小型。同時期の竪穴住居と同時に営まれている。

三重県菟上遺跡^{うながみ}(図4) 中期後半。居住域と墓域からなる丘陵上の集落。竪穴住居は大きく西群と東群に分かれ、それぞれに掘立柱建物が共存するが、掘立柱建物の比率は東群のほうが高い。独立棟持柱建物は4棟あり、いずれも梁間1間で桁行は4～7間、30～80㎡の大型建物である。そのうちの1つは布掘り桁である。1棟が集落の中央にあり、そのほかは東群に集中する。これらの3棟は竪穴住居に囲まれた中央空間に集中し、他の掘立柱建物と激しく重複する。密集する掘立柱建物群は、他の掘立柱に比較して大型が多く、さらに床面積134㎡の超大型竪穴住居が隣接する。

埼玉県北島遺跡(図5) 中期後半。竪穴住居2群からなる。そのうちの一方に4×2間、およ

表1-1 弥生時代の独立棟持柱建物一覧（庄内式期を含む）1

番号	遺跡名	所在地	類型	遺構 NO	時期	構造・規模（桁行×梁間：面積）
1	王子遺跡	鹿児島県鹿屋市王子町	I A	1号	中期終末～後期初頭（IV～V期）	2×2間（3.25×3.1m：10.1㎡）
				2号	中期終末～後期初頭（IV～V期）	4×3間（4.8×3.75m：18.0㎡）
				5号	中期終末～後期初頭（IV～V期）	3×3間（3.0×2.4m：18.0㎡）
				6号	中期終末～後期初頭（IV～V期）	4×3間（4.45×3.8m：16.9㎡）
2	前畑遺跡	鹿児島県鹿屋市郷之原町	I A	1号	中期終末（IV期）	4×3間（4.7×3.3m：15㎡）
				3号	中期終末（IV期）	2間以上×3間（？×2.95m：9㎡以上）
3	上野原遺跡	鹿児島県国分市大字川内字上野原	I A	1号	中期終末（IV期）	3×3間（4.44×3.60m：15.98㎡）
				2号	中期終末（IV期）	3×3間（4.61×3.50m：16㎡）
4	下大五郎遺跡	宮崎県都城市丸谷町下大五郎	I A	H6区1号	後期（V期）	2×1間（3.3×2.5～2.7m：8.58㎡）
5	立野遺跡	佐賀県久保泉町大字上和泉字徳永	I A	SB015	中期中葉（Ⅲ期）	1×1間（2.75×2.5m：7㎡）
				SB018	中期	4×3間（4.07～4.18×3.4～3.69m：13㎡）
				SB023	中期中葉（Ⅲ期）	4×3間（3.89～4.0×3.36m：12㎡）
6	平林遺跡	佐賀県三養基郡北茂安町	I B	SB1748	中期終末～後期初頭（IV～V期）	2×1間（3.98×3.04m：12.0㎡）
				SB1749	中期中葉（Ⅲ期）	2×1間（4.0×3.2m：12.9㎡）
				SB1754	中期後半（IV期）	2×1間（4.62×2.96m：13.8㎡）
7	平原遺跡	福岡県前原市大字有田字平原	II B	1号墓	後期	3×2間（4.4×4.2m：18.5㎡）
8	田村遺跡	高知県南国市篠原	I A	Loc.25SB1	前期（I期）	5×3間（8.2×4.1m：33.6㎡）
				L 3SB322	中期	3×1間（10×3.2m：32㎡）
9	西長峰遺跡	徳島県阿波郡阿波町字西長峰	I A	SB01	中期後半～後期（Ⅲ期新～V期初頭）	4×1間（12.1×5.5m：65㎡）
10	桜ノ岡遺跡	徳島県阿波郡阿波町桜ノ岡	I A	SA2001	中期後半（Ⅲ期後半）	1×1間（3.0×3.0m：9.0㎡）・中心柱をもつ
11	旧練兵場遺跡	香川県善通寺市西仙遊町			中期後半	3×1間
12	茶畑山道遺跡	鳥取県西伯郡名和町大字押平	I C	SB05	中期後半（Ⅲ期後半）	①4×1間（8.6×3.0m：25.80㎡） ②同一地点で建て替え
13	茶畑第1遺跡	鳥取県西伯郡名和町大字押平字小坂平	I A	掘立柱建物1	中期後半	6×2間（8.3×3.7m：30.5㎡）
				掘立柱建物10	中期後半～終末期	1（布掘り桁）×1間（8.2×最大3.2m：26.2㎡）
14	梅田萱峯遺跡	鳥取県東伯郡琴浦町大字梅田	I A	SB1	中期後半	3×1間（7.1×2.75m）
15	大山池遺跡	鳥取県関金町	I B	9号	中期後半（IV期）？	3×1間（5.8×3.3m：19.0㎡）
				2号	中期	3×1間（5.8×3.6m：20.9㎡）
16	唐古・鍵遺跡	奈良県磯城郡田原本町	I	第74次大型掘立柱建物	中期前半（Ⅱ期）	5間以上×2間（11.4m以上×7.0m：80㎡以上）
17	能登遺跡	奈良県桜井市大字河西	I A	SB02	庄内式期	3×2間（7.0×4.7m：32.9㎡）
18	ホケノ山遺跡	奈良県桜井市大字箸中	II B	石囲い木柵	庄内式期	1×1間（3.1×1.86m：5.77㎡）
19	南山高屋遺跡	兵庫県龍野市掛西町南山	I A	SB14	中期後半（IV期）	6×2間（9.2～9.5×4.4～4.9m：43.2㎡）、屋内棟持柱1
20	楠・荒田町遺跡	兵庫県神戸市兵庫区荒田町	I B	SB09	中期後半（IV期）	8×1間（8.5×3.8m：32.3㎡）、屋内棟持柱2
21	武庫庄遺跡	兵庫県尼崎市武庫之荘本町2丁目	I C	SB6	中期後半（IV1～2期）	4間以上×1間（9.76m以上×8.6m：65㎡以上）、屋内棟持柱2
				SB4	中期後半（IV1～2期）	6間以上×1間（4.2m以上×2.8m：18㎡以上）、中央屋内棟持柱1
22	玉津田中遺跡	兵庫県神戸市西区宮ノ下	I A	SB46001	中期後半（IV期）	4×1間（4.56～4.71×3.27～3.42m：15.2㎡）
23	有鼻遺跡	兵庫県三田市けやき台	I A	建物6	中期後半（IV期）	4×1間（7.5×4.0m：30㎡）
24	養久山・前地遺跡	兵庫県たつの市掛西町	I A	481掘立柱建物	中期終末（IV期）	4×2間（5.2×3.8m以上：20㎡）
25	平方遺跡	兵庫県揖保郡太子町		SB1	中期後半	3×1間（5.5×3.0m：17㎡）
26	八雲遺跡	大阪府守口市八雲北町ほか	I B	柱穴群1	中期前半（Ⅱ期）	①5×1間（6.5×3.3～3.5m：22㎡） ②6×2間（6.0×3.3m：20㎡）
27	上の山遺跡	大阪府枚方市茄子作南町	I B	掘立柱建物11	中期前半（Ⅱ期後半～Ⅲ期前半）	5×1間（8.6×4.45～4.60m：39㎡）
28	池上曾根遺跡	大阪府和泉市池上町・泉佐野市曾根町	I B	SB1	中期後半（Ⅲ期後半～IV期前半）	①大型建物1：10×1間（19.3×6.9×22.0m：135.0㎡）、屋内棟持柱2 ②大型建物B：8×1間（15.2×7.2m：109㎡）、屋内棟持柱2 ③大型建物A：7×1間（13.2×6.6m：87㎡）、屋内棟持柱2
29	尺度遺跡	大阪府羽曳野市尺度地内	I C	建物A	庄内式新段階	3×1間（6.4×4.4m：28.16㎡）、屋内棟持柱2
				建物B	庄内式新段階	3×1間（5.7～5.8×4.5m：25.65～26.1㎡）、屋内棟持柱2

遺構の位置	出土遺物	備考	文献
4棟は間隔をあけて存在			鹿児島県 1985
〃			〃
〃			〃
〃			〃
竪穴2棟と掘立柱建物3棟集中、3号と横に並列 他の掘立柱建物と重複、1号と横に並列 竪穴住居5棟と掘立柱建物2棟以上共存		地床炉をもつ平地式	新東ほか 1990：114-119 〃：126-127 富田 1991・長野 1988
〃			
竪穴住居12棟と掘立柱建物1棟 竪穴住居跡と群在			山田 1991 福田 1989：6
〃			〃：7
〃			〃：7-8
掘立柱建物だけが群在する箇所に存在。鍵状の溝が付近にある		区画溝を付近に伴うI C類の可能性あり	武谷・岡 1999：22-26
〃			
〃			
墓坑直上 竪穴住居と群在		方形周溝墓 棟持柱は1本削平されている	原田 1991：96・97・102 高知県 1986：168・210 前田・坂本 2006：68・69
〃			
2棟の掘立柱建物と重複	柱抜き取りの際に土器を埋納		柴田 1991
竪穴住居に囲まれる	廃絶後の柱穴に土器片を多量に詰め込む		湯浅・菅原 1993：70-73 森下 2001：27
竪穴住居を伴わない。大型掘立柱建物が東西に離れて並列。赤彩土器・瀬戸内系土器をともなう集積土坑・土器だまりが存在 竪穴住居が取り巻く掘立柱集中区		周辺で分銅形土製品、石器生産道具、漁撈具、銅鐸形土製品が出土 1回建て替え。柵列で区画するとされるが、[濱田 2006：51]は否定的	辻 1999：16 西川 2004：40-41
〃			〃：106-108
竪穴住居と混在		別の掘立柱建物と重複	湯村 2007：56-57
居住域の中の竪穴住居と離れた掘立柱建物集中区。大型掘立柱建物付近にある			景山・田中 1985：22-23 〃
〃			
狭い調査区の中に竪穴住居はない		総柱型。全体像不明	豆谷 2000
竪穴住居と混在、重複する			清水 1997：32
墓坑直上		墳丘墓	樋口ほか 2001：18
竪穴住居と並存			岸本・古本 1997：71-75
掘立柱建物だけの区域、群集する掘立柱建物のなかで最大			黒田・阿部 1995：58-59
区画溝が並走、同時期の竪穴住居はない			半澤・三輪 1999：50-53
大型掘立柱建物と重複			〃：56
竪穴住居と並存			甲斐ほか 1996：30
丘陵頂部にあり、周りを竪穴住居が取り囲む。小型掘立柱建物と重複		丘陵性集落	菅原ほか 1996
竪穴住居と並存	傍らから独立棟持柱建物描く 絵画土器など壺・甕・器台		岸本 1995：50-53
〃			
竪穴住居にはさまれた掘立柱建物単独区域。6棟の掘立柱建物が重複、うち2棟が独立棟持柱建物 遺跡の最高所に立地。竪穴住居はない			大阪府教育委員会 1987：15 森井ほか 2007：66-69
〃			
同一地点で4回の建て替え、そのうち3棟が独立棟持柱建物。大型井戸が正面に敷設		①の柱根の1本の伐採年が前52年 上限。環壕集落	秋山 2007：392-399
方形区画内に2棟並列、掘立柱建物2棟と重複		柱抜き取り痕	三宮・川端 1999：117・118
〃			〃

表1-2 弥生時代の独立棟持柱建物一覧（庄内式期を含む）2

番号	遺跡名	所在地	類型	遺構 NO	時期	構造・規模（桁行×梁間：面積）
30	下之郷遺跡	滋賀県犬上郡甲良町下之郷	I C	B・C棟	中期後半（Ⅳ期）	① B棟：6×1間（14.2×3.9m：55.4㎡） ② C棟：4×1間（9.4×4.2m：39.48㎡）
31	針江川北遺跡	滋賀県高島市新旭町	I C	SB12	後期後半	3×1間（4.6×3.4m：15.64㎡）
				SB14	後期後半	3×1間（4.5×4.4m：19.8㎡）
32	伊勢遺跡	滋賀県守山市伊勢町中東浦	I C	SB（4）	後期中葉	2×1間（3.2×3.6m：約11㎡）
				SB4	後期後半	5×1間（9.0×4.6m：41.4㎡）
				SB5	後期後半	5×1間（8.6×4.6m：39.56㎡），屋内棟持柱？
				SB7	後期中葉ないし後半	5×1間（8.7×5.1m：44.37㎡）
				SB8	後期後半	5×1間（9×4.5m：40.5㎡）
				SB9	後期後半	5×1間（9×4.5m：40.5㎡）
				SB12	後期後半	6×1間（10×4.5m：約52.5㎡）
SB-A	後期後半	2間以上×1間（2.4m以上×3.0m：7㎡以上）				
33	下鉤遺跡	滋賀県栗東市下鉤・荊原	I B	1992SB1	後期後半	5（布掘り桁）×1間（8.8×5.4m：48㎡）
				1997SB1	後期後半	4×2間（7.6×5.05m：40㎡），屋内棟持柱1
34	大塚遺跡	滋賀県長浜市西上坂町・新栄町			後期後半	布掘り桁×1間：5.2×4.2m：22㎡
35	中兵庫遺跡	滋賀県草津市北山田町・木川町	I A	第1号掘立柱建物	後期後半	2×1間（4×3.6m：14.58㎡）
36	下長遺跡	滋賀県守山市古高町	I C	SB1	後期後半～終末	3×1間（7.9×4.6m：36㎡）
37	黒田遺跡	滋賀県坂田郡近江町	I C	SB02	庄内式新段階	3×2間（4.95×4.4m：21.78㎡）
38	筋違遺跡	三重県一志郡嬉野町新屋庄字榎・下榎・筋違	I A	SB290	前期前半	4×2間（4.1×1.9m：7.79㎡）
39	長遺跡	三重県津市河辺町字池尻・石立	I B	SB142	中期後半	2×1間（4.0×2.6m：10㎡）
40	菟上遺跡	三重県四日市市伊坂町字菟上・牛谷	I A	SB223	中期後半（Ⅳ期）	7×1間（9.8×3.2m：31.4㎡），屋内棟持柱数箇所
				SB240	中期後半（Ⅳ期）	4×1間（10.4×4.4m：45.8㎡）
				SB284	中期後半（Ⅳ期）	6×1間（9.6×3.5m：33.6㎡）
				SB311	中期後半（Ⅳ期）	1（布掘り桁）×1間（17.7×4.6m：81.4㎡）
41	小谷赤坂遺跡	三重県一志郡嬉野町天花寺字小谷・赤坂	I A	SB292	後期前半	3×1間（3.96×3.0m：11.88㎡），片側は近接棟持柱
42	村竹コノ遺跡	三重県松阪市上川町	I A	掘立柱建物1	後期後半～古墳前期	6×1間
				掘立柱建物2	後期後半～古墳前期	5以上×1間
43	志賀公園遺跡	愛知県名古屋市中区中丸町3丁目	II A	SB19	中期中葉（Ⅲ期）以降	5×1間（9.5×4m：38.0㎡）
44	一色青海遺跡	愛知県中島郡平和町須ヶ谷	I A	SB77	中期後半	3×1間（7.6×3.6m：27㎡）
45	寺田遺跡	岐阜県岐阜市日野	I	SB14	中期中葉（Ⅲ期）	3×1間（5.9×3.0m：17㎡）
46	東原田遺跡	静岡県小笠郡小笠町下平川地内	I A	SH10	中期後半	5×1間（10.75×4.5m：48㎡）
47	登呂遺跡	静岡県静岡市登呂	I A	SB2001	後期	3×1間（6.9×3.8m：26.22㎡）
48	汐入遺跡	静岡県静岡市宮竹	I C	SB01・02	庄内式新段階併行期	① 2×1間（6.6×4.2m：27.72㎡）② 3×1間（8.0×4.2m：33.6㎡）
49	尾立遺跡	新潟県長岡市富岡町		第1号建物	中期前半（Ⅱ期）	2×1間（5.5×2.8m：15㎡）
50	蔵王遺跡	新潟県佐渡市新穂	I A	6号掘立柱建物		3×1間
51	中里遺跡	神奈川県小田原市中里	I A		中期中葉（Ⅲ期）	7×1間（10.5×4.4m：48㎡），屋内棟持柱2
					中期中葉（Ⅲ期）	6×1間（7.2×3.0m：22㎡）
52	常代遺跡	千葉県君津市常代字五反歩	II A	SZ119上ピット列	中期中葉（Ⅲ期）	12？×1間（9.0×6.0m：54.0㎡），屋内棟持柱
53	北島遺跡	埼玉県熊谷市大字上川上	I A	第60号掘立柱建物	中期後半（Ⅳ期）	4×2間（7.8～8.7×4.2～4.7m：34㎡）

遺構の位置	出土遺物	備考	文献
方形区画西端の特定空間。掘立柱建物と重複し5回建替え		環壕集落	近藤 2003
竪穴住居を含む居住域中の特定空間。SB13の壁心棟持柱掘立柱建物と対とされる		建物の1期。環壕集落	清水ほか 1992：126
竪穴住居を含む居住域中の特定空間。板塀の円形に区画された掘立柱建物 SB15 と対とされる		建物の2期。環壕集落	〃：184-185
方形区画内に掘立柱建物と共存		建物の1期	近藤 2003
方形区画の周囲に環状に配列された建物の一つ。SB5 と同時に並列の可能性あり		建物の4期。この時期に方形区画内の掘立柱建物は廃絶し、大型竪穴住居が進出	〃
方形区画の周囲に環状に配列された建物の一つ。SB4 と同時に並列の可能性あり	稲穂	〃	〃
方形区画の周囲に環状に配列された建物の一つ		建物の1ないし2期	〃
〃		建物の3期	〃
〃		建物の3期。方形区画内掘立柱建物と同時期	〃
〃		妻側にテラス状の露台あり。建物の3～4期	〃
〃		建物の3～4期	〃
竪穴住居と共存しない特定空間。小型掘立柱建物と並存	柱穴から高杯形土器と水晶片	柱の年輪年代は69年+	佐伯 2001・近藤 2003
竪穴住居と共存しない特定空間。直角の位置に別の大型掘立柱建物			〃
			丸山 1996：46（詳細は未報告）
散在した掘立柱建物だけで構成される			中村ほか 2001：101・108
竪穴住居を伴わず、掘立柱建物だけで構成される。古墳時代初頭の重複した独立棟持柱掘立柱建物2棟が隣接			伴野 2001：7
竪穴住居を伴わず、掘立柱建物だけで構成される。2棟1対。1棟は重複			宮崎 1994：47-52
竪穴住居と近接して同時に建てられている		環壕集落	水谷ほか 2007：19・22
竪穴住居群から離れた斜面下方に独立存在		ほかに3棟ほど独立棟持柱をもつ掘立柱建物があるとされるが、棟が桁と平行しない。高地性集落	池端 2000：97
竪穴住居が取り巻く掘立柱建物集中区。比較的大型の竪穴住居と掘立柱建物がある東群に位置する。他の掘立柱建物と重複		丘陵性集落	穂積・角正 2005：64
〃	磨製石鏃	〃	〃：65
居住域中の特定空間 中央に位置する		〃	〃：66
竪穴住居が取り巻く掘立柱建物集中区。比較的大型の竪穴住居と掘立柱建物がある東群に位置する。他の掘立柱建物と重複		掘立柱建物のうち最大、丘陵性集落	〃：67
竪穴住居と共存		環壕集落	木野本・川崎 2000：20-22
居住域で竪穴住居と共存するが、2棟の周りに竪穴住居はない		環壕集落	三重県 2005
		〃	〃
方形周溝墓と共存するが、墓を切る			永井 2001：11・17
大型竪穴住居に囲まれる。大型掘立柱建物伴う			樋上 2004：9・10
竪穴住居はない。掘立柱建物群の中央。建物のなかでも大型			橋詰ほか 1987：45・61
竪穴住居密集区に竪穴住居と混在		1・2号柱根の AMS 炭素 14 年代：160calBC ～ calAD50（1σ）	新堀 2001：145・146
竪穴住居群の付近で竪穴住居がない地帯		棟持柱は浅いのが1箇所確認されたが、汐入の所見から、独立棟持柱建物と判断	岡村 2004：30-31
同一地点で重複。掘立柱建物のみ。円形の周溝で囲郭。周囲は直線の溝によって区画される		②の棟持柱の1つに礎板が残る	岡村 2004：9-10
		独立棟持柱建物か明確ではない	寺崎ほか 1977：19-21
竪穴住居と混在			新堀 2001
竪穴住居と混在。他の掘立柱建物と重複			戸田 1999
〃			〃
方形周溝墓と重複			甲斐ほか 1996：256-258
竪穴住居に囲まれた最も標高の高い地点		屋内棟持柱2の4×1間の可能性あり	吉田ほか 2003：303・304

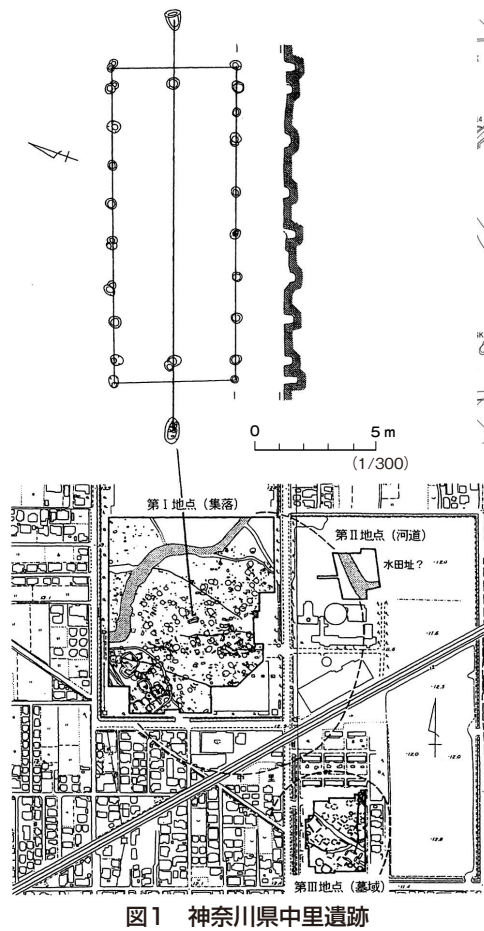


図1 神奈川県中里遺跡

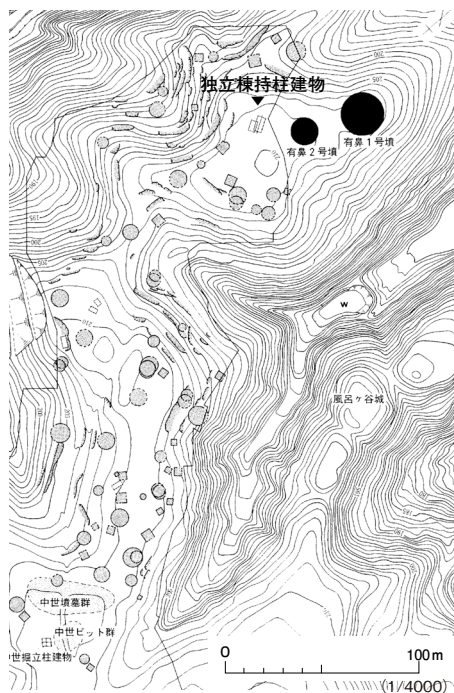


図3 兵庫県有鼻遺跡

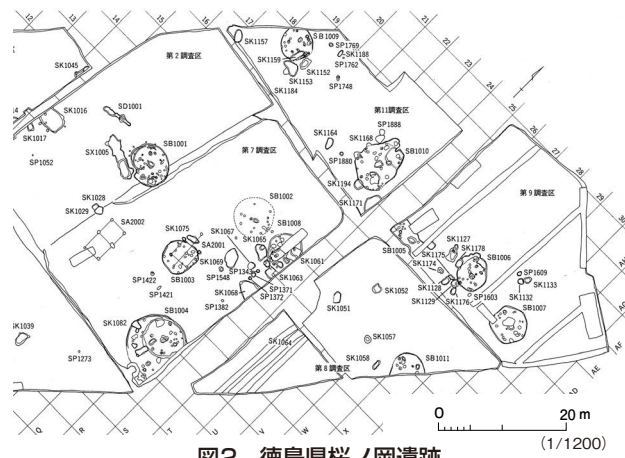


図2 徳島県桜ノ岡遺跡

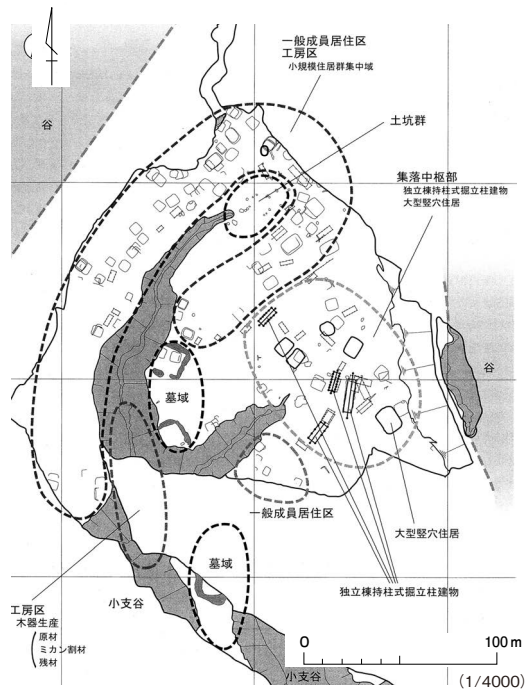


図4 三重県菟上遺跡

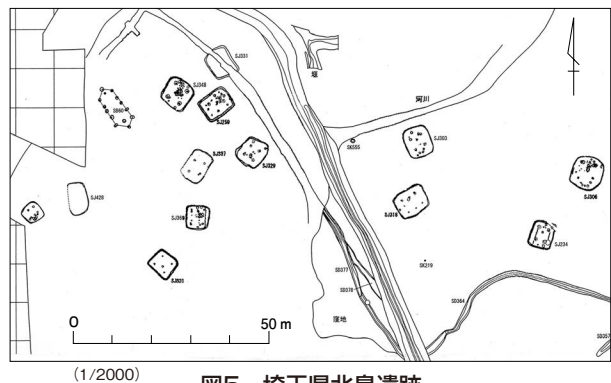


図5 埼玉県北島遺跡

そ 35㎡の掘立柱建物が建つ。これは、堅穴住居に囲まれた、その付近で最も標高の高いところに位置している。

徳島県西長峰遺跡 中期後半～後期初頭。4×1間、60㎡以上の大型独立棟持柱建物を中心として、そのまわりを小型掘立柱建物、堅穴住居が取り囲む。独立棟持柱建物は、2棟の掘立柱建物と重複する。柱を抜き取った際に土器を埋納しており、祭祀行為がうかがえる。

鹿児島県前畑遺跡（図6） 中期終末。梁間3間、面積15㎡の小型独立棟持柱建物2棟が、棟筋を横方向にそろえて並列される。このうちの1棟は別の掘立柱建物と重複する。堅穴住居2棟と近接しており、他に1棟の掘立柱建物が同時期とされる。

三重県村竹コノ遺跡 後期後半～古墳前期。居住域と墓域を環壕で画した集落。6×1間と5間以上×1間の独立棟持柱建物が2棟検出された。堅穴住居の途切れた空間に、棟筋を同じくして2棟が並列していた。

【B類】

大阪府八雲遺跡（図7） 中期初頭。3ないし4間×2間、面積20～22㎡の小型に近い中型独立棟持柱建物が、南北の堅穴住居群に挟まれた箇所が存在している。その箇所は掘立柱建物だけで構成されているが、調査範囲が狭いので堅穴住居が混在する可能性も否定できない。独立棟持柱建物は他の掘立柱建物と激しく重複しており、都合5回の建て替えがおこなわれた。独立棟持柱建物自体も、1回建て替えられている。

大阪府池上曾根遺跡（図8） 中期後半。環壕集落のほぼ中央に、10×1間、135㎡を最大として同一地点で4回建て替えられた独立棟持柱建物が存在する（SB1）。これらは、D→A→B→C→1の順に建て替えられており、いずれも面積が50㎡を超える大型であるが、独立棟持柱をもつA・B・1がそれをもたないC・Dよりも大きい。この建物の南正面には内径約2mのクスノキ製大型井戸が敷設されていた。この建物の東南には、それと直角に梁間1間の大型建物が1棟建っている（SB2）。棟持柱の間隔は30m以上に及ぶ。この建物は、独立棟持柱がほぼ同一地点に2本ずつあるので、建て替えられたことは確実である。古い遺構は、桁柱が16～17本ほどになるとの見方もあるが、新しい遺構は桁が2列の溝になっている。これらがどのような建物になるのか、まだ確定していないが、布掘り桁であれば、似たような構造の建物は鳥取県茶畑第1遺跡や滋賀県下鈎遺跡、三重県菟上遺跡などに類例がある。ただ、SB1を中心としてSB2を西に折り返した地点に建物が建ち、全体でコ字形の四合院型式風の建物になる、あるいはそれを囲む大きな方形の区画が存在しているという復元は疑問視されている。また、周辺の蛸壺や石器の埋納遺構についても、大型建物と関連付けて祭祀的性格を主張する意見とそれに対する批判がある。

兵庫県^{くすのき}楠・^{あらたちょう}荒田町遺跡（図9） 中期後半。4×2間、約60㎡の大型建物である。調査区の中は掘立柱建物だけによって構成される。掘立柱建物は全部で9棟あり、主軸方向をそろえたり、ほぼ直角に配置するなど、規則性が認められる。独立棟持柱建物以外は重複が著しいが、独立棟持柱建物は他とやや離れて独立して存在している。他の建物よりも大きい。

鳥取県^{だいせんいけ}大山池遺跡（図10） 中期後半。3×1間、19㎡の小型建物である。堅穴住居跡から遠く離れた掘立柱建物だけによって構成される空間に位置する。そのなかでも、4×3間の総柱大型掘立柱建物に隣接している。

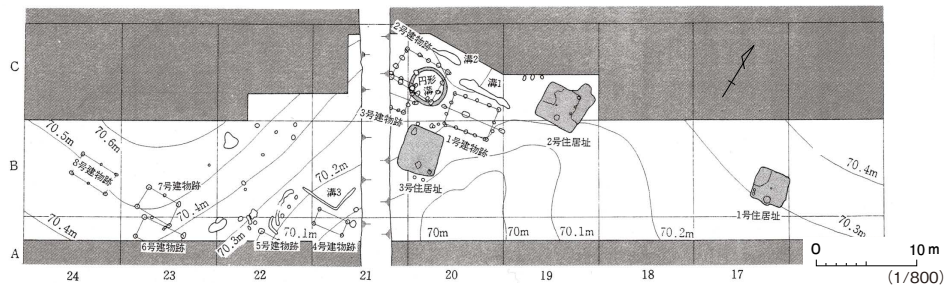


図6 鹿児島県前畑遺跡

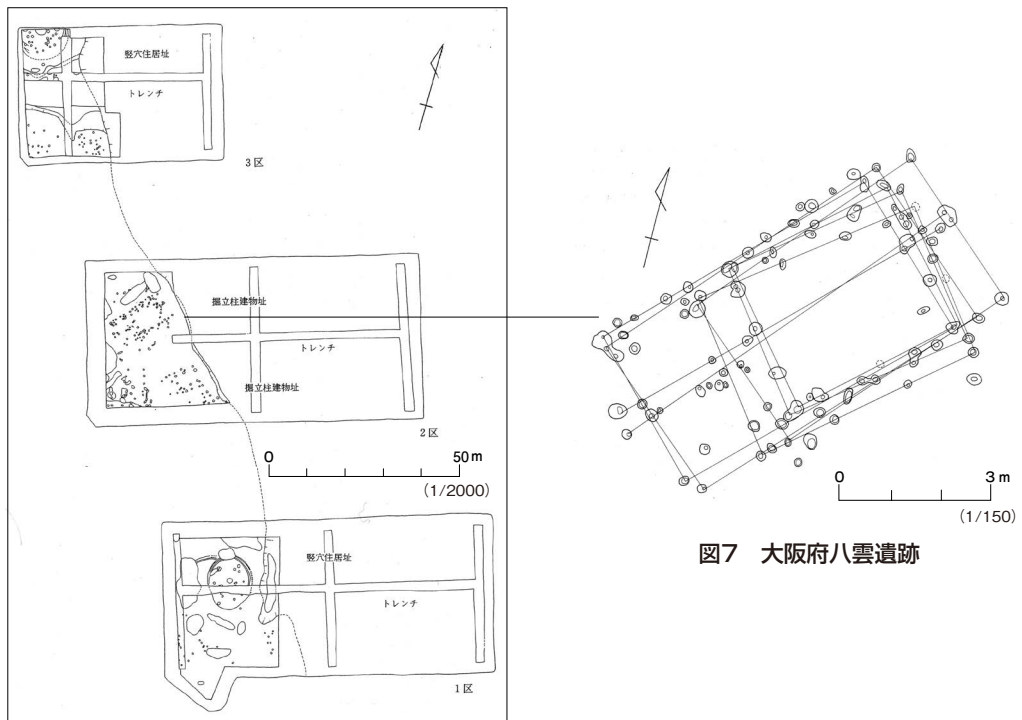


図7 大阪府八雲遺跡

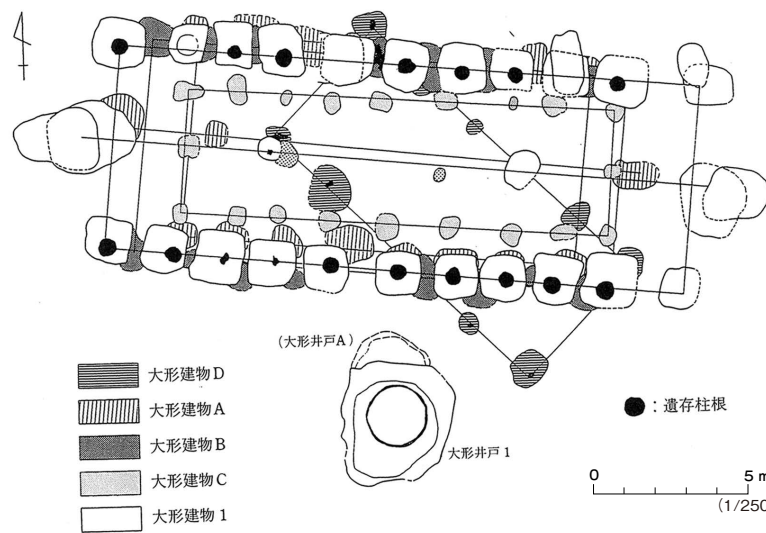


図8 大阪府池上曾根遺跡

三重県長遺跡 中期後半。高地性集落。2×1間、10㎡ほどの小型建物が、堅穴住居群から離れた北の斜面に単独で位置する。

滋賀県下鈎^{しもがり}遺跡(図11) 後期後半。蛇行する河川に沿って、南北に1棟ずつ5×1間と4×2間の独立棟持柱建物が建っていた。48㎡、40㎡といずれも大型に近い大きさである。前者は布掘り桁をもち、柱穴から高杯形土器と水晶片が出土した。小さな掘立柱建物が付随する。後者には、それと直角に大型掘立柱建物が建つ。ここは、板塀で囲まれていたとの所見もあり、C類に編入される可能性がある。調査区全域に堅穴住居は認められなかった。

滋賀県黒田遺跡(図12) 古墳時代の可能性がある庄内式新段階の例である。2棟の同じ規模の建物が棟筋を平行させて並列している。まわりにはほかに施設はない。2棟のうち片方が独立棟持柱建物で、3×2間、約22㎡の小型に近い中型建物。もう1棟は1回建て替えられており、重複する。そのうちの古い建物は、布掘り桁である。

【C類】

鳥取県茶畑山道遺跡(図13) 中期中葉～後半。4×1間、約26㎡の中型独立棟持柱建物が1棟検出された。それと棟筋を並行させて2棟の掘立柱建物が存在する。これらは軸の方向を同じくする柵によって囲まれていたとされるが、疑問もある〔濱田2006:51〕。同時期の堅穴住居はない。それに続く時期に柵はなくなるが、独立棟持柱建物は同一地点で建て替えられており、それに対して直角に別の掘立柱建物が建てられ、他にも数棟の掘立柱建物で構成されるようになる。やはり同時期の堅穴住居はない。建物の周辺からは、分銅形土製品や銅鐸形土製品など特殊な遺物が出土した。

兵庫県武庫庄^{むこのしょう}遺跡(図14) 中期後半。独立棟持柱建物が2棟、棟の軸と並行して走る直線の区画溝をはさんで検出された。建物はいずれも未完掘であるが、東は4間以上×1間、現状で80㎡以上の100㎡を越す超大型建物である。小型のほうはそれと相似形の大型掘立柱建物と重複している。調査区に同時期の堅穴住居はないが、狭い範囲なので建物配置の全体像は不明である。

滋賀県下郷遺跡(図15) 中期後半。多重の溝に囲まれた環壕集落のほぼ中央にコの字状の区画溝があり、その北西端から独立棟持柱建物が検出された。建物は同一地点で激しく重複し、5回にわたって建て替えられており、そのうち2回が独立棟持柱建物であった。B棟が最も大きく6×1間、およそ55㎡と大型である。C棟がそれに次ぐ大きさで、独立棟持柱をもたない掘立柱建物はそれらより小型である。コ字状の区画溝の内側には大型の掘立柱建物が建っており、数回の建て替えが推測されている。ただ、この溝は調査区の一部で検出されているにすぎず、全体がどのような構造になっているのか、明らかでない。

滋賀県伊勢遺跡(図16) 後期中葉～後半。集落の中心に柵や溝で方形の区画を設け、そのまわりに独立棟持柱建物を主とした大型建物を環状に配列する。方形区画の中にも1棟、独立棟持柱建物が認められる。これらの建物の時期は大きく後期中葉と後半に区分され、さらにそれぞれが2期の4期に区分される。1期に中心部の建物が成立するが、近接棟持柱建物をもつ45㎡の大型掘立柱建物を含む3棟からなり、このなかに2×1間、約11㎡の小型独立棟持柱建物が配置される。環状にめぐる独立棟持柱建物は、方形区画の中心建物からおおよそ50m離れた地点に建てられ、後期後半の3期に北東に2棟並列して、3～4期にその西に2棟並列して、4期に中心の南西に2棟並

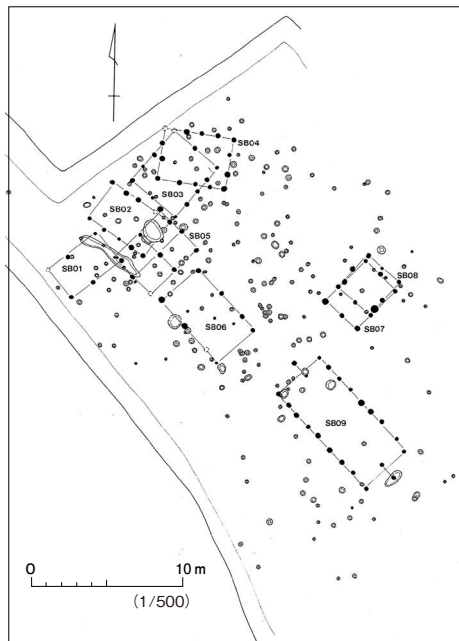


図9 兵庫県楠・荒田町遺跡

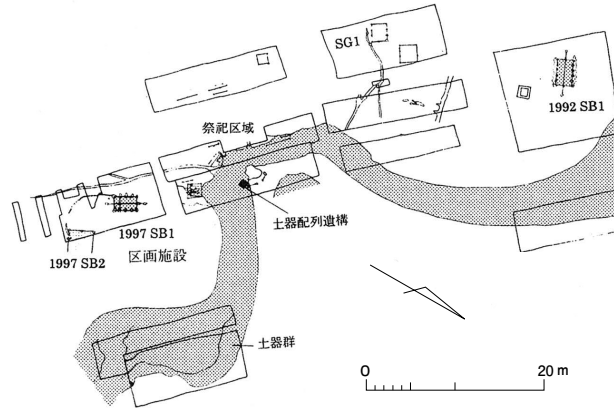


図11 滋賀県下鉤遺跡

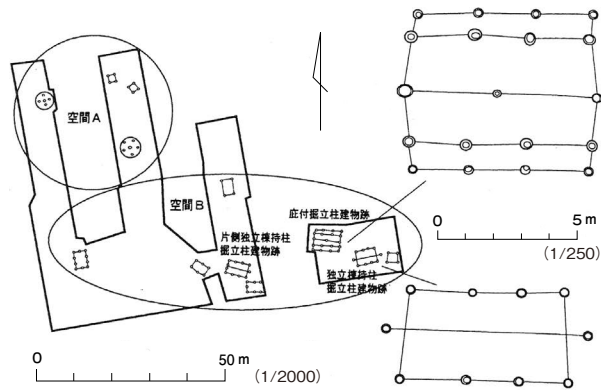


図10 鳥取県大山池遺跡

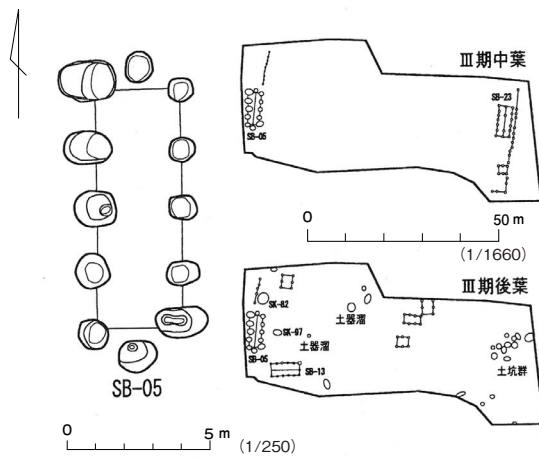


図13 鳥取県茶畑山道遺跡

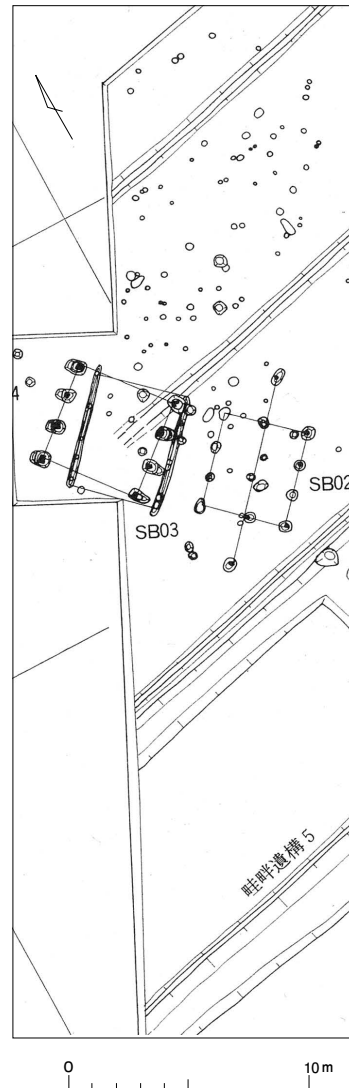


図12 滋賀県黒田遺跡



図14 兵庫県武庫庄遺跡



図17 滋賀県針江北遺跡

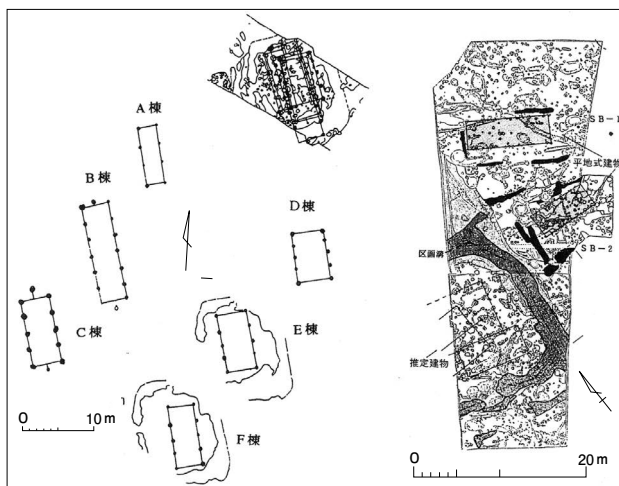


図15 滋賀県下之郷遺跡

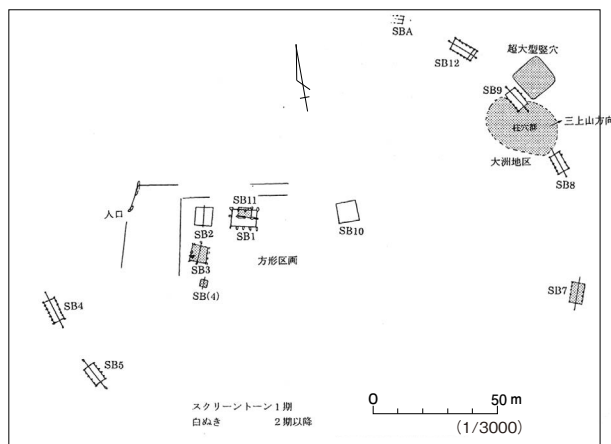


図16 滋賀県伊勢遺跡

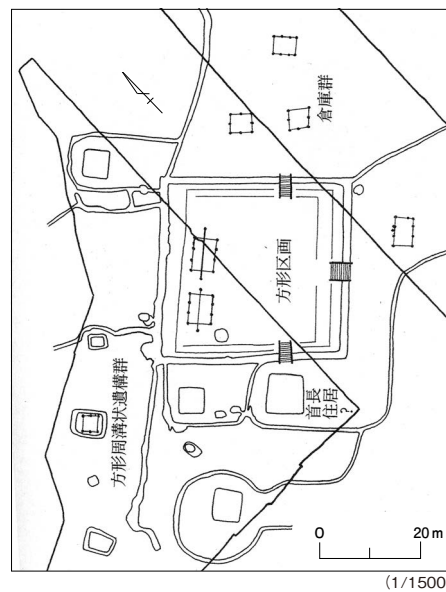


図18 大阪府尺度遺跡

列して建てられる。このように環状にめぐる独立棟持柱建物は2棟1対で建てられていく。いずれも5ないし6間×1間、40～50㎡以上と大型ないしそれに近い大きさである。1期の中心建物には、床面積185㎡に及ぶ超大型竪穴建物が存在するが、そこには焼き床や壁際にレンガ状の建築材を認めることができる。

滋賀県針江川北遺跡（図17）後期後半。環壕集落の中央に掘立柱建物群をもち、その周囲に竪穴住居を配し、環壕の外側に墓域を形成する。掘立柱建物群のうち、まず掘立柱建物と独立棟持柱建物が主軸を直角にして配置され、その後建物を切るように楕円形の矢板列の溝がめぐらされ、その中心に掘立柱建物が、外側に独立棟持柱建物が建てられた。独立棟持柱建物はいずれも3×1間で、約16㎡と20㎡の小型である。

滋賀県下長遺跡 後期後半～終末。伊勢遺跡に続く核集落。3×2間、36㎡の独立棟持柱建物が存在する。その後の庄内式新段階に、隣接地点に独立棟持柱建物が重複して2棟築かれたが、いずれも20㎡と小型化している。この地点の西方およそ200mに、直角に曲がった区画溝を伴う大型掘立柱建物が位置する。露台のついた総柱建物であり、首長の居館とされる〔岩崎2002〕。

大阪府尺度遺跡（図18）古墳時代の可能性がある庄内式新段階だが、C類の典型例として参考にあげておく。竪穴住居に囲まれた一角に、外側で36×37mのほぼ正方形の区画溝が設けられる。北西溝に沿って、棟筋を一致させて並列したほぼ同じ規模の2棟の掘立柱建物が、3時期にわたって同一地点に築かれる。独立棟持柱をもつのは最も古い段階である。いずれも3×1間で、26～28㎡と小型に近い中型である。

（3）墓域・墓に存在する場合（Ⅱ類）

【A類】

愛知県志賀公園遺跡（図19）中期中葉以降。方形周溝墓の密集区の傍らに、5×1間、38㎡の中型独立棟持柱建物が存在する。Ⅱ～Ⅲ期の方形周溝墓の上に建てられ、付近の大型方形周溝墓がⅡ～Ⅲ期に位置づけられることと、柱穴内からⅡ～Ⅲ期の土器が出土していることから、これらの方形周溝墓造営の直後に建てられた建物である。あるいは居住域に伴う建物かもしれない。

千葉県とこしろ常代遺跡（図20）中期中葉。方形周溝墓が群集する墓域が2群からなるが、そのうちの南に位置する墓域Bに独立棟持柱建物が存在している。及川良彦は、この建物は居住域に伴う施設である可能性を示唆している〔及川2002：118-119〕。四隅の切れた大型方形周溝墓の溝に囲まれた部分に、溝と45度の角度をなして建てられる。12×1間、54㎡の大型建物である。建物の柱穴からは中期中葉の土器片が出土している。建物の大きさの割には柱穴が浅いが、報告者は方形周溝墓の墳丘から打ち込まれた柱だから、削平によって浅くなっていると看做す。しかし、方形周溝墓の時期は中期後半であり、時期が前後している。

【B類】

福岡県ひらばる平原遺跡1号墓（図21）弥生後期の方形周溝墓。2段に掘り込まれた墓坑をめぐって、3×2間、18.5㎡の独立棟持柱建物が建てられる。棟の軸は墓坑の長軸と一致しており、墓坑のほぼ中心に棟筋が通る。埋葬主体部は木棺であり、棟筋よりややずれるが、主軸は棟筋に平行している。埋葬主体部からは素環頭大刀や各種の玉類が、外側の墓坑からは鏡が39面出土した。時期に

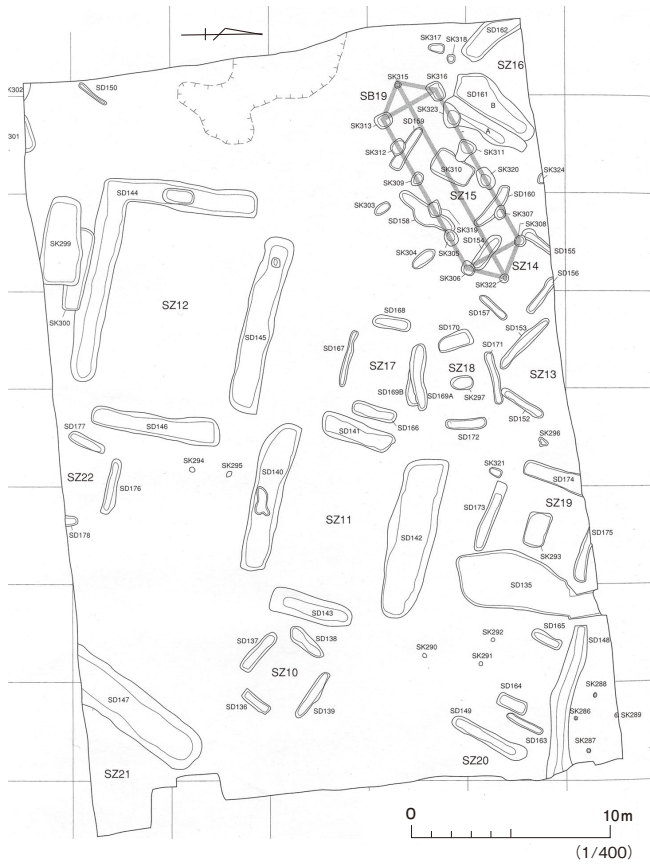


図19 愛知県志賀公園遺跡

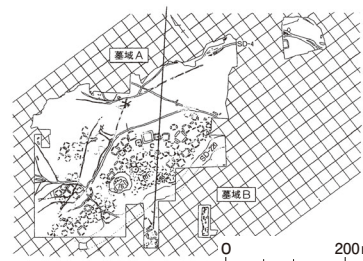
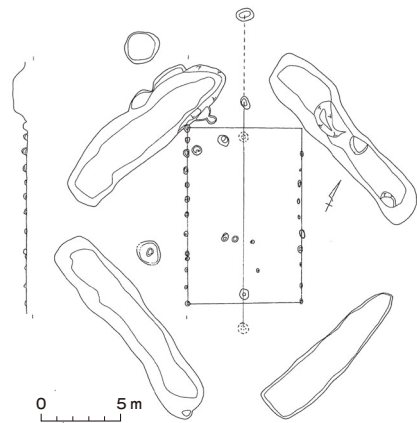


図20 千葉県常代遺跡

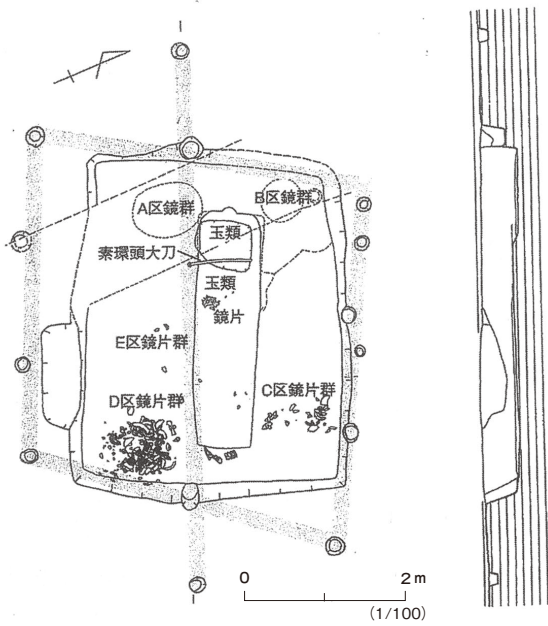


図21 福岡県平原遺跡

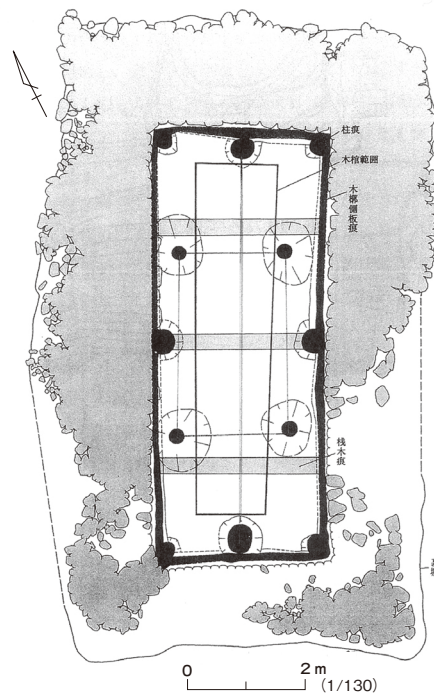


図22 奈良県ホケノ山遺跡

についてはさまざまな意見があるが、2世紀と考えられる。

奈良県ホケノ山墳丘墓（図22）弥生後期末、庄内式期の全長約80mの前方後円形墳丘墓。後円部は2ないし3段築成である。石囲木槨墓の内側に埋設された木棺を取り囲むように、1×1間、5.8㎡の独立棟持柱建物が構築されている。梁・桁の4本は木槨の内側を押さえている6本の柱よりもやや内側に打ち込まれ、棟持柱は木槨の内面に接して打ち込まれる。

③……………特質

(1) 構造と地域色と系譜

以上、居住域と墓域に分けて、独立棟持柱建物の典型的な事例に目を通してきた。このうち、居住域に伴うI類の類例に即して、構造、大きさ、地域色、出現の時期と系譜、集落における位置、出土遺物、他の遺構や絵画との関係などに焦点を当てつつ、その特質を整理しておきたい。

表1の構造の欄をみて気づくのは、本州地方と九州・四国地方では大きな違いのあることである。本州地方は、梁間が1ないし2間に限られるが、九州・四国地方では梁間3間の建物が主流をなす。これはすでに岸本道昭が指摘しているが〔岸本1998:89〕、前者を本州型、後者を九州・四国型とする。また、本州型では池上曾根遺跡、大阪府尺度遺跡、滋賀県伊勢遺跡、同・下鈎遺跡、三重県菟上遺跡、神奈川県中里遺跡、千葉県常代遺跡などで屋内棟持柱をもつ建物がある一方、九州・四国型に一切それを欠いており、その点でも上屋構造に大きな違いのあることがわかる。

高知県田村遺跡は弥生前期の九州・四国型であり、三重県筋違遺跡は弥生前期の本州型である。西は九州地方、東は関東地方にまで本州型は拡散するが、大阪府氏の松遺跡の弥生前期片側独立棟持柱建物を含めて考えると、本州型が近畿地方で生まれて東西にひろがったことは間違いなさであろう。九州・四国型については、田村遺跡例がその起源になったのかどうか、類例が少ないので判断は難しい。

では、独立棟持柱建物は、弥生文化に独自に生まれたのか、縄文文化に系譜が求められるのか、あるいは大陸に起源があるのだろうか。朝鮮半島では、京畿道河南市漢沙里遺跡で数棟検出されているだけである〔高麗大学校発掘調査団1994〕。時期は、中島式Ⅱ・Ⅲ期、瓦質土器の初期であるから、3世紀と新しく、これが弥生文化に影響を及ぼしたとは考えられないので考慮の外におくことができる。

それでは、縄文文化からの系譜はどうだろうか。弥生時代の独立棟持柱建物は、東日本縄文時代晩期まで継続する掘立柱建物の一形態と等しい。宮本長二郎は両者の系譜関係を考えており〔宮本1998:264〕、村上恭通はそれを肯定し〔村上2000:190-193〕、小林青樹はより積極的に主張している〔小林2003:70・2004:35〕。たとえば新潟県新発田市青田遺跡など、縄文晩期の新潟県域にこの種の建物が多く認められる。新潟県域はいわゆる浮線網状文土器の分布圏である。浮線網状文土器は東海地方の長原式土器と関係が深く、近畿地方では滋賀県域や三重県域にかなり浸透し、大阪府域や兵庫県域にまで達する。そうした点からすると、小林らの説も一考の価値はある。ただ、中間地域の様相がよくわからない点と、新潟県域などではごく一般的な建物であり、特別な建物として

表2 類型別時期別独立棟持柱建物出土遺跡と建物棟数 (括弧内は建物の棟数。重複例は算定していない)

	前期	中期前半	中期中葉	中期後半	中期後半～後期初頭	後期	後期後半	庄内式新段階
I A	2 (2)		2 (4)	15 (20)	2 (5)	3 (3)	3 (4)	
I B		2 (2)	1 (1)	4 (4)	1 (1)		1 (2)	
I C				3 (4)		1 (1)	3 (10)	3 (3)
II A			2 (2)					
II B						1 (1)		1 (1)

採用されるにはどのような経緯があったのかまだわからない点が多いことから、断定することはでき⁽¹⁾ない。

(2) 類型の変遷と規模の変化

先におこなった居住域における独立棟持柱建物のあり方の分類(表2)では、A類が最も多く53遺跡中28遺跡であり、B類10遺跡、C類9遺跡となっている。A類は前期に成立して後期にまで継続するので(表1)、これが集落における基本形態なのであろう。A類でも埼玉県北島遺跡例のように、数棟の竪穴住居に1棟の独立棟持柱建物からなるのがひとつの原初的なあり方のように思われる。

A類は集落のなかで竪穴住居と渾然一体となっている場合もあるが、徳島県桜ノ岡遺跡、鳥取県茶畑第1遺跡、兵庫県有鼻遺跡、三重県菟上遺跡、北島遺跡のように、竪穴住居に囲まれ、なかには有鼻遺跡や北島遺跡のように標高の一番高い場所に占地するなど、居住域の特別な場所におかれた場合がある。図23・24は独立棟持柱建物の桁行と梁間による建物の規模とその変遷を示したもののだが、それによれば3群にまとまる。20㎡以下を小型、20～50㎡を中型、50㎡以上を大型とす⁽²⁾る。独立棟持柱建物は、唐古・鍵遺跡例の80㎡以上が示すように、初期の段階から大型化したものがある。したがって、無区画・竪穴住居に囲まれた中央志向・大型を伴うという点から、独立棟持柱建物は居住集団全体の絆と直結する建物として出発したといえよう。

中里遺跡のように、複数の居住集団が独立棟持柱建物をもつ場合もある。中里遺跡では居住集団どうしの格差は明瞭ではないが、菟上遺跡はまた異なる様相を示す。菟上遺跡は二つの居住単位によって構成され、そのうちの一方に掘立柱建物が多く、さらにそのなかでも大型竪穴住居をもつ特定の区域に独立棟持柱建物を含む数種類の大型掘立柱建物が集中していた。これは、集団の中に格差が生まれ、特定の集団が析出してきたことを示す。集中した数種類の掘立柱建物が竪穴住居から分離して特定の区画を占めるようになるのがB類であり、それがC類になると溝などで区画されたり、区画溝に付随するようになる。表2から明らかのように、A・B類は後期に至ると数を減らす⁽³⁾がC類は変わらず、尺度遺跡で典型的な姿をみせて兵庫県松野遺跡など古墳時代の首長居館へと数を増しつつつながっていくのであるから、A類(中里)→A類(菟上)→B類→C類という流れは、独立棟持柱建物が共同体全体の管理から首長層の台頭とともに特定集団への独占的管理へと移っていったことを示す。

最初から大型のものがあった独立棟持柱建物は、135㎡をはかる池上曾根遺跡の建物のように、類例が増加する弥生中期後半に巨大化の頂点を迎えた。下鈎遺跡や伊勢遺跡のように、40㎡クラス

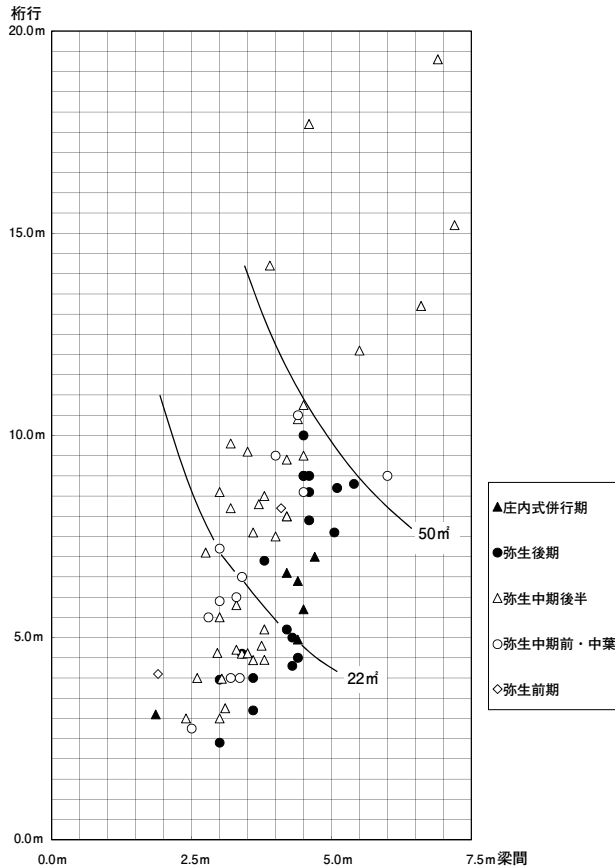


図23 弥生時代の独立棟持柱建物の規模

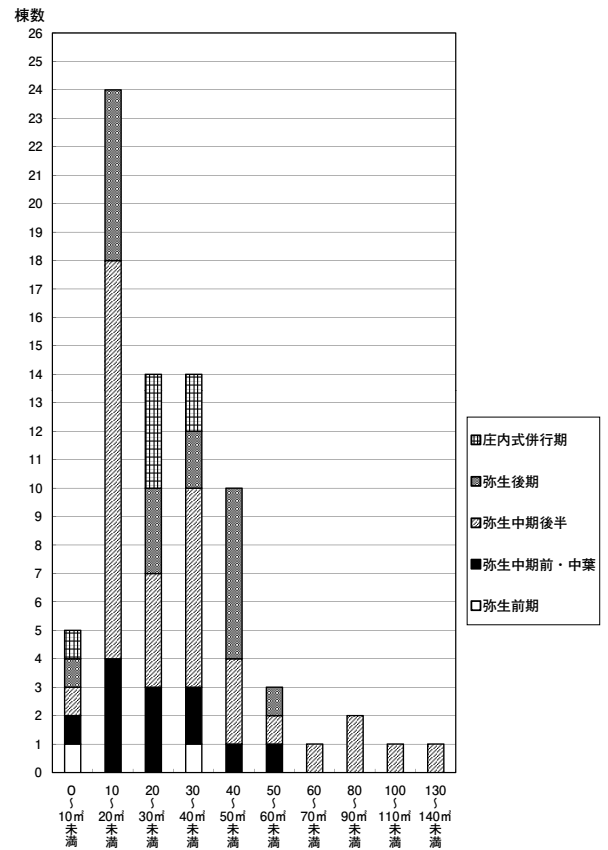


図24 弥生時代独立棟持柱建物の規模の変遷

の大型に近い建物は後期に継続するが、伊勢遺跡の方形区画内の独立棟持柱建物は、11㎡と小型化していた。区画溝の中にある独立棟持柱建物は後期末末に小型化の傾向を強め、尺度遺跡や古墳中期の松野遺跡など、40㎡未満の中型あるいは小型が大勢を占めるようになる。弥生中期後半は、集落の規模が増大する時期である。それとともに人口も増加したであろう。独立棟持柱建物の大型化と小型化の流れは、中期後半までは集落の肥大化と建物の大型化が即応していることを示すとともに、首長の独占管理体制に入ると首長個人あるいは特定階層集団の建物へと性格を変化させたことを物語るのではないだろうか。

(3) 他の遺構とのかかわり、絵画資料と出土遺物をめぐって

三重県長遺跡や北島遺跡のように、独立棟持柱建物が一棟だけ建っているのは例外であり、大半は複数の掘立柱建物によって構成されている。その場合も、異なる種類や大きさの掘立柱建物からなっているので、掘立柱建物群は異なる役割をもつ建物の集合体であったと予想される。伊勢遺跡の方形区画における大型・中型掘立柱建物と小型の独立棟持柱建物の組み合わせなどがその典型であるように、特定区域から方形区画の形成、すなわち I C 類における掘立柱建物の動向がとくに注目される。

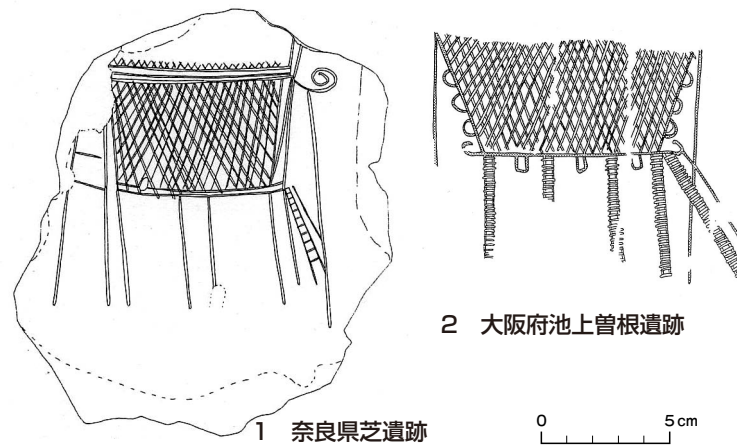


図25 屋根に飾りをもつ独立棟持柱建物の土器絵画

滋賀県下之郷遺跡や下鈎遺跡は集落の中に方形の区画が設けられるとされる〔近藤 2003・2006〕。全体像はもとより、方形か否か不明瞭だが、兵庫県摂津市加茂遺跡の方形区画の存在を認めれば、⁽³⁾弥生中期後半に集落の中の特定範囲を区画することがはじまったとみてよい。

池上曾根遺跡では、環壕集落の中央にL字形に大型建物が建てられている。この建物の配置をめぐっては、四合院型式風のコの字形に建てられていたのではないかとする推測もあったが、その後の調査によってもう一方の側に建物はなく、L字形の2棟も時期が異なることが指摘されている〔豆谷 2004: 315〕。しかし、茶畑山道遺跡に同様なL字形の建物配置がある点は注目できる。なぜならば、兵庫県武庫庄遺跡で区画溝と軸を一致させて建物が配置されているからであり、古墳時代の首長居館における方形区画に沿った建物配置の先駆的な様相を、弥生中期後半に認めることができるからである。

滋賀県針江川北遺跡は、独立棟持柱建物が別の種類の掘立柱建物と2棟1対で建て替えられていたが、いずれも軒や梁の方向を平行あるいは直角にしている。また、独立棟持柱建物2棟が棟筋をそろえ、近接して並列されるのは、鹿児島県前畑遺跡、伊勢遺跡、三重県村竹コノ遺跡、尺度遺跡にみることができ、複数の建物の規格的配置として注目できる。建物の並列あるいはL字形の配置は、方形区画を意識した結果であるといえよう。

だが、池上曾根遺跡でそのような建物配置を取りながらもまだ溝で区画することはなく、建物は大型である。このことから、首長の取り仕切る空間が萌芽している可能性がある一方、集落あるいは地域共同体の全体性の中に大型建物が埋没している段階として、近畿地方の中期後半という時代を評価しなくてはならない。⁽⁴⁾それは、首長層の墳墓が群集する方形周溝墓のなかに埋没していることと相即的である。

独立棟持柱建物を含む複数の建物が同時に建てられていたことは、土器絵画からも推測することができる。兵庫県たつの市養久山・前地遺跡の壺形土器には独立棟持柱をもつ寄棟造りの建物が2棟描かれ、鳥取県米子市稲吉角田遺跡の壺形土器には、柱と梯子の異常に高い建物と切妻造りの屋根の建物が並べて描かれている。また、建物を描いた土器絵画には、軒の先端にらせん状の装飾を描き加えるなどの装飾をもつ例が散見され(図25)、この種の建物の性格を考えるヒントになる。

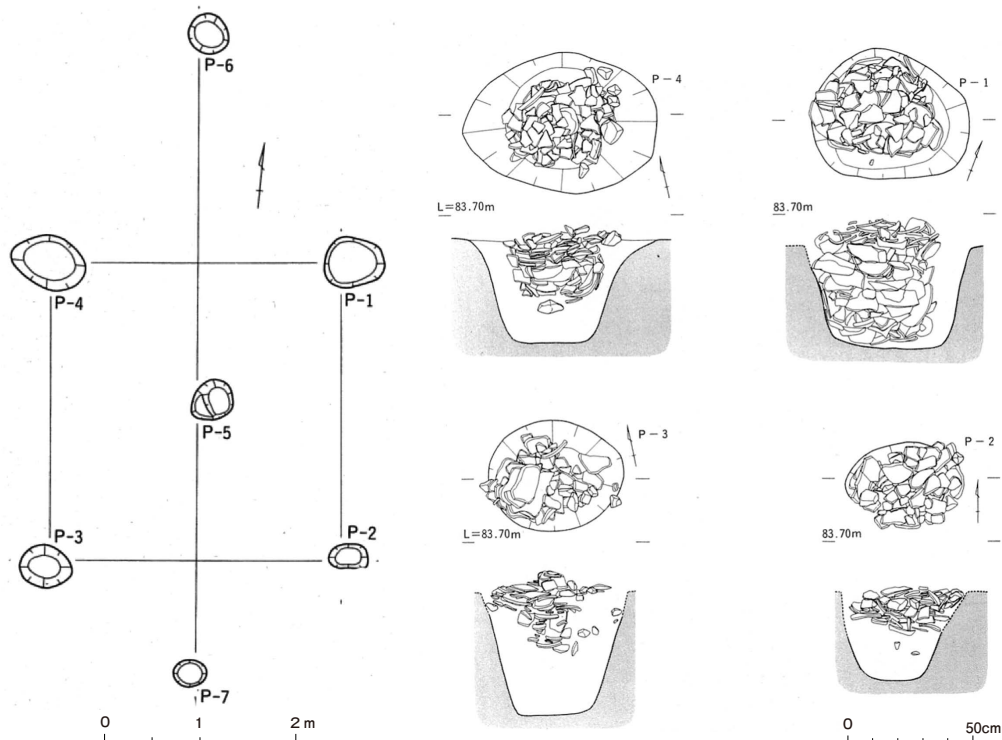


図26 徳島県桜ノ岡遺跡の独立棟持柱建物と柱穴遺物出土状況

伊勢遺跡や針江川北遺跡では、独立棟持柱建物は別の箇所にて建て替えられている。近接して建て替えられる場合もあれば、方形区画を中心とした環状のライン上で建て替えられるなど、先行の建物を意識していることは明らかである。さらに大阪府八雲遺跡や徳島県西長峰遺跡、池上曾根遺跡、下之郷遺跡、尺度遺跡など、同一地点で3～5回の建て替えによって激しく重複している例がある。独立棟持柱建物を含む特殊な掘立柱建物の建て替えについては、伊勢神宮などの遷宮に類するとの意見〔辰巳1990:162〕や、首長の代替わりごとになされたという解釈がある〔禰亘田2000:39-40〕。

出土遺物にはどのような特徴があるだろうか。柱穴から多量の土器が詰め込まれて出土した桜ノ岡遺跡は、建物の廃絶に伴う儀礼のおこなわれたことが明らかである（図26）。西長峰遺跡でも柱の抜き取りに際して土器を埋納していたとされ、下鈎遺跡では柱穴から高杯形土器と水晶片が出土し、廃絶に際して地鎮祭がおこなわれたと解釈されている。

(4) 独立棟持柱建物の特質

弥生後期から古墳時代に、独立棟持柱建物は首長居館に取り込まれていくことから、首長にかかわる建物であることを推測した。また、上に述べたようにさまざまな点から祭儀にかかわる建物であることも推測できる。こうした点は、すでに多くの論文で述べられている。

たとえば金関愷や広瀬和雄は、このような建物はもともと基本的には稲倉であり、木偶が納められた農耕祭祀の「神殿」である、と考えている〔金関1985:73, 広瀬1996:112〕。これに対して、佐原真や春成秀爾は、神殿に納める神像に相当するものが弥生時代になくことから、何らかの祭儀に使用された建物であることは認めつつも、神殿説には否定的である〔佐原1996:8, 春成1996:〕

17]。古代史・宗教史の岡田精司は、古代日本の祭祀には建物は必要とせず、社殿の成立は7世紀後半以降になるとこれも神殿説に否定的であり、集会所の可能性はないかとしている〔岡田1999:50〕。秋山浩三は、池上曾根遺跡の大型建物を分析し、同一地点に建て替えられた5棟の建物のうち大型のものに限って棟持柱が存在していることから、重い軒を支える実利的な面を強調する〔秋山2007:416〕。下之郷遺跡の6棟もやはり大型の2棟が棟持柱をもっており、秋山説に有利である。

だが、独立棟持柱をもつ大型建物は、弥生後期を経て古墳時代に小型化の傾向にある。それでもなお、首長居館の中において独立棟持柱で支えられているのは、実利的な面からだけでは説明がつかない。特定の遺跡に限って大量に出土する弥生土器絵画に祭祀的な意味を認める立場に立てば、そこに描かれた画題にもそれが反映しているとみることが許されよう。さらに、軒にらせん状の装飾をつけた独立棟持柱建物の絵画は、この種の建物が何らかの祭儀に使われていたことを証拠立てている。池上曾根遺跡の大型建物の正面にしつらえられた大型の井戸も、秋山のように実利的な面ばかりでなく、水に対する儀礼に用いられた可能性を考えたい。古墳時代の首長居館では、群馬県三ツ寺遺跡に典型的なように、水の儀礼がその中でおこなわれていた。弥生中期～後期に萌芽した首長の営為にかかわる空間に祭儀的な空間が取り込まれていったことは、十分推測することができる。

このように、独立棟持柱建物は集落において特別な建物であることは疑いない。したがって、独立棟持柱建物は共同体の祭儀にかかわり、のちにそれが首長の祭儀にかかわる建築物になったことは、やはり動かないのではないか。問題は、祭儀の中身である。

④……………墓とのかかわり

(1) 木槨墓の系譜と平原遺跡の墓

そこで、もう少しその性格を突きつめるため、墓とのかかわりを問題にする。独立棟持柱をもつ掘立柱建物が墓に伴うのは、北部九州地方、近畿地方と南関東地方である。北部九州地方では、福岡県平原遺跡〔原田1991:23〕、近畿地方では奈良県ホケノ山遺跡であり〔広瀬2008〕、いずれも墳墓の埋葬主体部の上に建物が築かれたB類である。

ホケノ山墳丘墓の埋葬施設は石囲木槨墓とされており、平原遺跡の木棺を埋葬主体とする2段掘りの土坑も、棺外に鏡を大量に納めている点は木槨墓に通じるところがある。木槨墓は日本列島で自生したものではない。弥生時代の木槨を論じた田中清美によれば、日本列島で最も早く木槨がみられるのは北部九州地方であり、福岡県穂波町スダレ遺跡など中期初頭にさかのぼる。それは、春秋戦国時代の箱形木槨に近いとされる〔田中1997:123〕。弥生後期になると木槨墓は北部九州地方では衰退する一方、鳥根県出雲市西谷3号墓や岡山県倉敷市楯築墳丘墓など鳥根県域や鳥取県域および岡山県域と広島県域の中国地方に現れ、弥生後期終末にはさらに京都府芝ヶ原12号墓や兵庫県西神3号墓など近畿地方の外縁に認められるようになる。これらは楽浪の木槨墓に祖形が求められ、朝鮮半島を通じて中国大陸の木槨墓につながることを、田中は論じた〔前掲:125〕。

原三国時代の墓制の流れを整理し、楽浪と弥生文化を比較した高久健二によると、1世紀後半～

2世紀中葉に楽浪郡の木槨墓が導入され、韓国慶尚南道良洞里7号墓のような木槨墓が形成されると同時に、楯築墳丘墓に木槨墓が認められる〔高久2001:56〕。良洞里古墳群では、2世紀後半～3世紀中葉に木槨墓の大型化と副葬品の多量化が進行するが、それが楽浪の大型木槨墓の要素を導入していた可能性が高く、ホケノ山墳丘墓や前期古墳との共通性が認められるという。つまり、楽浪墳墓の影響によって墓の変遷に画期が認められ、その画期が三韓地域と日本列島で共通していたのである〔前掲:59〕

西谷3号墓にしても楯築墳丘墓にしても、埋葬主体部に多量の水銀朱が使用されており、先の木槨墓の系譜とともに中国墓制の影響とみなすのが妥当である。日本列島で最も早く個人を埋葬した高い墳丘が築かれたのが中国地方である。そして、弥生後期後半に至り墳丘墓が丹後地方など近畿地方北部に現れ、それらの地方では副葬品も豊富になった。中国地方では、島根県松江市田和山遺跡で楽浪系の硯〔岡崎2005〕や鳥取市青谷上寺地遺跡からジョッキ形木製品、島根県出雲市姫原西遺跡からは笏形木製品〔足立1999〕が出土している。これらは水銀朱と同様、いずれも弥生中期後半～後期に日本海を通じて朝鮮半島から漢文化が影響を及ぼすようになった結果出現したのであろう。

平原遺跡が存在していた一帯は伊都国の領域であり、平原1号墓は伊都国王墓との見方が強い。その築造年代を2世紀とすれば、107年に後漢に使者を送った倭国王帥升の墓の可能性も否定できない。そのことと、墓の上に建物が建っていることは関係ないのであろうか。

中国で王墓の上に建物を建てるのは、春秋戦国時代に一般的になる。戦国時代の墓である河北省中山王墓から『兆域図』という銅版が出土しているが、そこには王墓の上に築かれた堂の平面図が描かれている〔傳1980:99〕。これと漢代の陵寝制を比較した楊寛によると、堂は漢代の「寝」すなわち墓主の魂が憩い、日常生活を送る場所に相当するという〔楊1981:44〕。墳丘は3段に築成され、墳頂には瓦が堆積しており、建築物の存在が裏付けられる。春秋時代の陝西省秦公1号墓も墓坑上に瓦が堆積しており、戦国時代の河南省魏王陵も方形の墳丘の上に建築跡があった。墓上の建築物は殷墟婦好墓に認められるように、商代にさかのぼる。祖先祭祀が商代に盛行したことは青銅器の銘文から明らかであり、犠牲獣や殉葬遺体の出土もそれを裏付けている。墓上に建てられた建築物は、死者の霊を祭る施設に他ならない。そして、墓上の建築物は、秦・漢代以降まで認められるらしい〔王1992:189〕。

平原遺跡を発掘した原田大六は、墓上建築物を殯屋とした〔原田1991:22-24〕。しかし、殯は個人の死が確定するのを待つための期間であり、完全な死を求めるための儀式である〔和田1969:653〕。複葬制を分析したR. エルツは、葬儀が死とその直後、中間の段階、最終の儀式の3段階からなっていることを明らかにした。骨化が完了しないことには死者の霊魂は生活空間にとどまって生者をおびやかすのである〔エルツ1980:48〕。つまり、肉体的な死は本当の死ではないのだから、殯屋は墓に設けられることなどない。平原遺跡1号墓の木槨墓に類する埋葬主体部や副葬品が漢文化の影響を受けているとすれば、墓上建築も死者の霊を慰撫する施設として導入された可能性がある。では、それが独立棟持柱建築をとっていることはどのように考えればよいのだろうか。その前に、階層的に上位の死者の霊に対する扱いが北部九州ではどのようなものであったのか、みておくことにしたい。

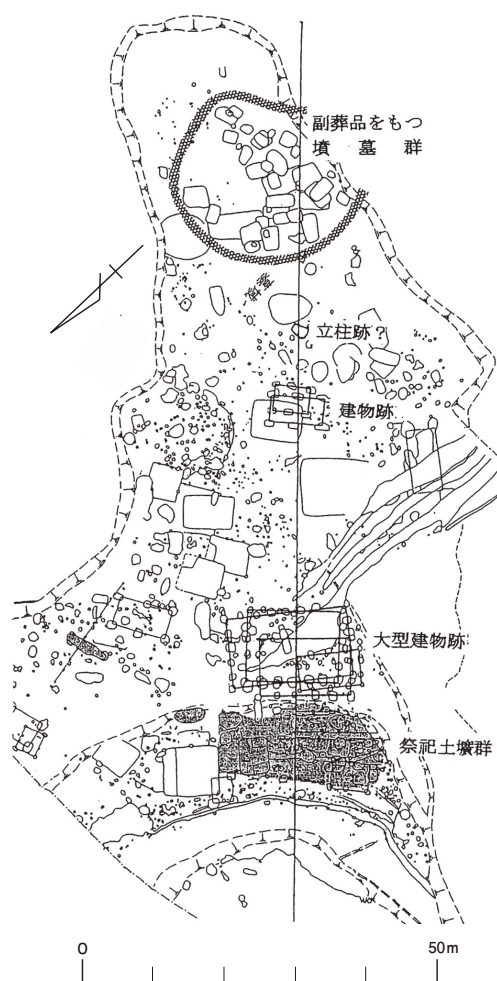


図27 佐賀県杣比本村遺跡

これは同県神埼市・吉野ヶ里町吉野ヶ里遺跡にも認められる〔前掲：20〕。吉野ヶ里遺跡は後期終末、北内郭に3×3間、156㎡の総柱超大型建物が建てられるが、建物の中軸線上には北に向かって中期の甕棺墓が列をなし、約100m北に小規模な掘立柱建物があり、さらに北10mに銅剣を副葬していた中期前半の墳丘墓が存在している。大型建物で折り返した軸線上の最南端には中期前半に形成され後期にまで維持された盛土遺構があるが、ここから祭祀土器が多量に出土し、祭壇とされている。福岡市吉武高木遺跡の多量の副葬品を伴う墓域に近接した121㎡の超大型建物や同市久保園遺跡の超大型建物も、特定の墳墓群とかかわりをもつとされる。久保園遺跡には建物の付近に丹塗りの祭祀遺物を伴う溝や土坑がある。

七田は吉野ヶ里遺跡にみられる郭の鍵状入り口や張り出しに設けられた物見櫓などに中国の影響を認め、集落の空間設計なども含めて区画の方形志向や大型建物の出現契機が自然発生的なものではなく、中国や楽浪・帯方郡との外交が契機となったことを推測している〔前掲：38-39〕。軸線上に墓や大型建物、祭祀施設が配置されるのも、漢文化の影響と見てよい〔金関2001：302〕。

春秋戦国時代に墓の上に建てられていた寝殿は、秦・前漢に受け継がれたが、後漢時代には陵のそばに「寝」をおこし、陵の傍らに「廟」を建てる「陵側起寝」・「陵傍立廟」の制度、すなわち

(2) 北部九州の墓と大型建物

北部九州では、弥生中期初頭に副葬品を多量にもつ墓が出現し、中期後半にかけて墳丘を築き、区画をもつ特定個人墓を生み出すなど、日本列島内で他にない独自性を発揮した。これは朝鮮半島南部を通じて、あるいは楽浪郡の影響によって生まれた北部九州ならではの墓制の特質である〔高久2001〕。

遺構の配置にも漢文化の影響が認められる。七田忠昭は、北部九州では特定墳墓群と大型建物、あるいは祭祀施設が一体となっている場合があり、大型建物が祭祀（祖霊祭祀）に深いかかわりをもっていたと主張している〔七田2003：36〕。

佐賀県杣比本村遺跡は、弥生中期初頭～前半の木棺墓・甕棺墓群46基が形成されたあと、中期後半になるとそこから50m北に面積が167㎡に及ぶ超大型掘立柱建物が構築される。この大型建物は、同一地点で複数回建て替えがおこなわれたので、遺構は激しく重複している。建物の背後には、祭祀土器を伴った土坑群が多数存在する。これらの施設は、直線の軸上に配列されているところに特徴がある（図27）〔七田1994：20〕。そ

陵寝制度が確立した。宗廟は祖先祭や宗族の儀式をおこなうところであるほか、政治上の重要な儀式をおこない、決定した命令を布告するところでもあった〔楊 1981: 50-51〕。北部九州の墳墓群が大型建物よりも時期がさかのぼることからすれば、祭りの対象となるのは大型建物を築いたものにとっての祖先である。赤色に塗彩された高杯や器台など特殊な土器を用いた祭祀土坑が大型建物や甕棺墓に伴うのも北部九州の葬送儀礼の特徴であり、祖先との飲食儀礼が墳墓やそれに伴う大型建物でおこなわれたことを示す。北部九州では祖先の霊を祀る行為が、墓群と対をなす大型建物でおこなわれていたのだろう。

このように、北部九州では漢文化の影響によって中期から墳墓群に伴う大型建物で祖霊祭祀がおこなわれるようになり〔小田 1994: 167〕、それが平原遺跡の墓上建築につながっていったと思われる。

しかし、ここで疑問が生じる。中国では墓坑上の建物から墳墓の傍へと寝あるいは廟が移っていったのに対して、北部九州では逆の過程を歩むことである。どのように解釈すればよいのだろうか。中国では早くから王権が確立しており、陵寝制度は皇帝陵を中心に展開した。また、陵における魂を祭る施設の移動は、墓の構造が槨から室へ変化していくことと符合する。これに対して北部九州では祭りの対象は特定の個人ではなく集団である。墓群全体を祭るには、墓域の傍に祠堂を建てる必要があった。それが、ようやく王墓、平原遺跡1号墓の段階になって個人の墓が祭祀の対象となった。そして、墓構造がいまだに木槨墓に類する構造であったので、中国の古い制度が踏襲されたのではあるまいか。つまり、日本列島の王権の位相および墓の構造に規定されて、中国とは反対の流れをたどったと推測される。

(3) 近畿地方の方形周溝墓と祖霊祭祀

それでは、近畿地方で独立棟持柱建物は墓とどのような関係にあるのだろうか。近畿地方で墓に伴う例は、ホケノ山墳丘墓を除いて一切ない。近畿地方の弥生時代の主流な墓は方形周溝墓だが、独立棟持柱建物を含めて建物が伴っていた例も一、二のそれらしきものを除けば、聞かれない。

近畿地方の方形周溝墓を北部九州の墓制と比較した場合の特質として、副葬品をもつ例が極端に少ない点と、比較的高い墳丘を築く例が二、三を除いて明確でない点があげられる。墓に多量の副葬品を納めるのとそうでないのとでは、「あの墓には多く副葬品を入れた人を祭ってある」という感覚が沸き起こるかそうでないかの点で、大きな差がある。それに墳丘をもつともたない差が加われば、なおのことであろう。甕棺墓の列の先に副葬品を多く納めた墳丘墓が存在し、権威をもった祖先へと人々がつながっていく様子が吉野ヶ里遺跡などからうかがえるのに対して、近畿地方の方形周溝墓は連結して延々と築かれる場合はあるものの、それがつながっていくべき副葬品をもった特定の墳墓を欠いている。大型の方形周溝墓も墳丘をもつことはあっても、小型のそれを睥睨して墓域のなかで際立っているといった様子はない。

それは、社会のなかにおける死者の立場を墳墓によって表現する差異化意識〔高木 2003: 174〕の違いを映し出しているが、それと同時に祖先に対する意識のありようともかかわっている。河内地方の方形周溝墓は、群構成のあり方からして、何世代にもわたり長期継続的に造営されたのではなく、せいぜい2世代程度であると指摘されている。大型墓も短期間で終わり、上位階層集団のなかでも明確な系譜意識が読み取れない〔大庭 2007: 67-68〕。近畿地方の方形周溝墓が家長の死と権限

の継承を契機として墓の区画が更新されていくのに対して、北部九州の甕棺墓は墓域が踏襲されていることから、近畿地方では直系家族がより強く意識されて世代ごとの自立性が強いものに対して、北部九州では累世的であるという〔寺沢1990：27〕。溝口孝司は、弥生中期後半の福岡県朝倉市栗山遺跡C群墓域の分析を通じて、北部九州では甕棺墓を数世代にわたって意識して重複させることにより、葬送執行者などが自らの社会的地位を特定祖霊との関係によって象徴的に表示するようになる場合のあることを論じた〔溝口1995：88〕。

中国では商代以降、王権の正当性を祖先とのつながりによって証明するの必要があり、それが宗廟の祭祀の発達を招いた〔都出2000：172〕。王権の形成への動きが早く、そしてそれが中国王朝との関係のなかで展開した北部九州とそうしたことが希薄な近畿地方とでは、祖霊に対する意識がたんに血縁的結合の強化という意味だけでなく、政治的に利用していく方法の点でも大いに異なっていたといわねばならない。

このように、近畿地方の方形周溝墓は祖先の霊を祭る意識が北部九州と大きく違う。それは、政治的社会形成へ向けての動きに質的な差があったからである。弥生時代のある時点までは、王権形成が北部九州に比べて未熟な近畿地方で独立棟持柱建物を含む大型建物が墓に伴わない点に、方形周溝墓における祖霊に対する意識のありようがあらわれている。

(4) 南関東地方の独立棟持柱建物の性格と系譜

独立棟持柱建物は、関東地方では中里遺跡や常代遺跡で弥生中期中葉に出現する。中里遺跡の独立棟持柱建物の成立過程と性格に関しては、それ以前の集落との関係からみていく必要がある。二者の間には、以下のような関係がある〔設楽2004〕。①中里遺跡は足柄平野の真ん中に位置する相対的に規模の大きな農耕集落である。それ以前の集落は台地の縁に展開するが、中屋敷遺跡に代表される再葬墓を営む小規模な集落群である。②台地の縁の集落がおおむね弥生Ⅱ期で廃絶するのに対応するように、中里集落がⅢ期に成立する。③中屋敷遺跡と中里遺跡で、集団の象徴的器物である土偶形容器が出土している。④中里遺跡の居住域はいくつかの群からなっており、それらには縄文文化の伝統を引いて堅穴住居が環状をなす群が含まれている。こうした関係性からすると、中里の集落は台地の縁に展開していた小集落が結集して成立した可能性が高く、その目的は灌漑という協業を要する水田稲作農耕にあったことは疑いない。

弥生再葬墓は居住域から離れ、独立して営まれる場合が多いが、周辺居住集団の共同墓地と性格づけられている〔星田1976：46-47、石川1999：175〕。縄文時代の環状集落は中央に墓域を有する場合が多い。縄文中期の環状集落は、後期になると気候寒冷化などによって分散化していく傾向がある。それに伴い墓域が居住域から独立するが、墓域が依然として大型であるのは、分散化した居住集団の精神的紐帯を維持するモニュメント的性格をもっていたからである。精神的紐帯とは、祖先祭祀を中核としたものであろう〔設楽2008：262-265〕。弥生再葬墓も、分散化した小集団の祖霊祭祀施設としての役割をもっていた。居住域からは独立しているものの、理念としては居住集団の中核に位置する墓地の性格を引き継いでいるといつてよい。

中里遺跡はそれら分散小集団が結集して形成された集落であるが、かつて分散居住に伴って必要とされていた紐帯強化のための再葬墓は、結集によって必要性を失った。それに変わって登場した

のが居住集団の中央に位置する独立棟持柱建物であった。独立棟持柱建物は、中里遺跡の居住域の中心に建っており、あたかも再葬墓が形を変えて集落の中心施設になったかのようである〔小林2003:69-70〕。中里遺跡は近畿地方からの影響がきわめて強く、独立棟持柱建物も近畿地方から導入されたのだろう。後述のように、近畿地方の独立棟持柱建物には祖霊祭祀の役割があり、役割もろとも近畿地方から南関東地方に導入された可能性が考えられるが、その背景には上述のような地域固有の動向があった。

常代遺跡では、方形周溝墓の上にこの種の建物が築かれている。出土遺物からすると建物のほうが方形周溝墓よりも古いが、図20にみるように規格的な両者の関係性は、柱穴からの出土遺物が古い時期のもの混入である可能性を疑わせ、報告者が言うように建物が墳丘上に建てられた可能性を考えたくなる。常道に従って出土遺物を優先せざるを得ないが、そうであっても中期中葉にこの付近には墓が展開していたのだから、独立棟持柱建物が墓域に伴う建物であることは十分に考えられるのである。この建物を意識して、大型方形周溝墓がそれを壊した上に築かれた可能性もある。

関東地方の弥生中期後半の環壕集落では、大型方形周溝墓が1基だけ環壕の内側に築かれた例が群馬県高崎市高崎城三の丸遺跡や千葉県佐倉市大崎台遺跡などにある。これが、中里遺跡や常代遺跡の独立棟持柱建物の性格を考える上で有効である。居住域のほぼ中央に設けられている点は、弥生再葬墓の地域集団の中核施設としての性格を髣髴させると同時に、中里遺跡の独立棟持柱建物との共通性を想起させる。常代遺跡では、大型方形周溝墓と独立棟持柱建物が一体化していた点に、この二者の密接な結びつきがうかがえよう。

環壕集落の中央にある方形周溝墓が地域社会の中心的首長の析出を反映したものであるとすれば〔安藤1996:55〕、居住域の中心に存在するという同じ状況の独立棟持柱建物は、祖霊祭祀にかかわる性格をもっていたと考える余地がある。方形周溝墓に弥生再葬の祖先祭祀的性格が受け継がれ、それが居住域での集団結集の原点として祖霊祭祀の役割を帯びた農耕祭祀の施設である独立棟持柱建物へと転化したのである〔設楽2008:285〕。

南関東地方では、平原遺跡1号墓と同じく独立棟持柱建物が祖霊祭祀に関係していた。その傾向がない近畿地方をはさんだ二つの地域で建物に同じ性格がみられるのは、それを発現させた母体が、縄文文化と中国大陸とそれぞれで異なっていたことによる。東海地方にⅡ類がみられるのは、南関東地方と東海地方が文化的につながりの強いことによるのだろう。

⑤……………独立棟持柱建物の役割

(1) 農耕儀礼と祖霊祭祀

弥生時代に近畿地方で祖先の霊を祭ることはおこなわれていなかったのかといえ、そうではないだろう。

3世紀の『魏書』東夷伝高句麗の条に、「居所の左右に大屋を立て、鬼神を祭り、また霊星、社稷を祀る」とあり、それと対になるように「宗廟を立て、霊星社稷を祀る」とある。社稷の社は地に内在する力の化身、すなわち土地の神、稷は穀物で〔松本1922:112・125〕、古くから地神と穀神

が「社稷」と呼ばれて併祭された [三品 1973:232]。霊星、鬼神は祖先の霊である。つまり、地神・穀神を祀る際、祖先霊も祭っている。

農耕神が祖霊とともに祭られていることに、いかなる意味があるのだろうか。三品彰英は、東南アジアの農耕儀礼では結婚式や幼児の命名式が収穫祭に随伴しておこなわなければならないという点に、穀物と人間の生命とが互換的に観念されていることを見出した。原始・古代社会では人間霊と穀霊は融即的に取り扱われ、したがって死者の霊祭りは穀霊祭儀とともに実修されるので、与祝祭と収穫祭は死者の霊祭りを兼ね備える点で広い社会的機能をもっている [前掲:227]。祖霊に新穀を供えるのが収穫祭の一般的な方式であるのは、そのような理由がある。

唐代の『周書』異域伝高麗の条に、2棟の祭殿に祖神である男女2体の像を木でつくり祭っている記述がある。また、3世紀の『魏書』韓伝馬韓の条に5月の播種のと「鬼神を祭る」という記述があることから、金閔恕は3世紀の鬼神は男女の木像で表現されていたのではないかと類推し、弥生時代の木偶の原型をそこに求めた [金閔 1985:72-73]。さらに、稲吉角田遺跡の絵画土器に描かれた一対の銅鐸と一対の高床倉庫に注目して、それらは高麗の祠堂と同じく、それぞれ男女の祖霊を対象としたものと考えた [金閔 1986:296]。縄文時代になかった鳥形木製品が弥生時代に出現するのも、イネや祖先の霊の乗り物としての役割を鳥に認めるようになったからだという意見はすでに定着している [金閔 1982, 春成 1987]。銅鐸にはしばしば鳥が描かれるが、鳥はイネの魂を運ぶものであるため、銅鐸にはそれをつなぎとめる役割があったと考えるのが自然である [春成 1987:22]。伝鳥根県銅鐸に人面と鳥が描かれているのは、祖先とイネの魂の結びつきを示す。そうしたことからすれば、銅鐸、鳥形木製品、木偶、高床倉庫の絵画が集中する近畿地方の弥生農耕社会では、穀霊祭祀と融即した祖霊祭祀が展開していたと考えなくてはならない。

方形周溝墓での祖霊祭祀は希薄だったから、近畿地方で祖霊祭祀はおもに居住域でおこなわれたと考えざるを得ない。平原遺跡1号墓の独立棟持柱建物をみて気づくのは、九州型が主流をなす地域でありながら、本州・四国型であることである。近畿地方から導入されたのだろう。平原遺跡1号墓の独立棟持柱建物に祖霊祭祀の役割があったと考えることが許されるならば、導入元である近畿地方のこの種の建物に、祖霊祭祀の役割があったと考えなくてはならない。導入元でこの役割がなかったら、墓に導入する意味はないからである⁽⁵⁾。

(2) 古文献・絵画にみる建築物と独立棟持柱建物の相関

『魏書』東夷伝高句麗条にある大屋が宗廟を指している説を紹介した。大屋は居所の左右に建てられ、霊星と社稷を祀っていると記している。周～秦・漢代の儒家の書である『礼記』は、諸侯が国の神霊を祭る位置を定めるときには、社稷は公宮の右側に、宗廟が左側に建てられると記している [竹内 1977:729]。独立棟持柱建物は当初から大型のものを含み、しばしば独立棟持柱建物同士あるいは別の掘立柱建物と2棟一組で建てられる場合があった。

弥生土器絵画に2棟一組で高床建物を描く場合があるのは、金閔が注目した点である [金閔 1985:69]。辰巳和弘は、伊勢遺跡の2棟一組の独立棟持柱建物を高句麗条の記述と重ね合わせ、2棟の役割の違いを推測する手がかりとしている [佐伯編 2001:97]。

したがって、弥生時代の掘立柱建物の役割は、互いに関連しながらも多様であることが推測でき

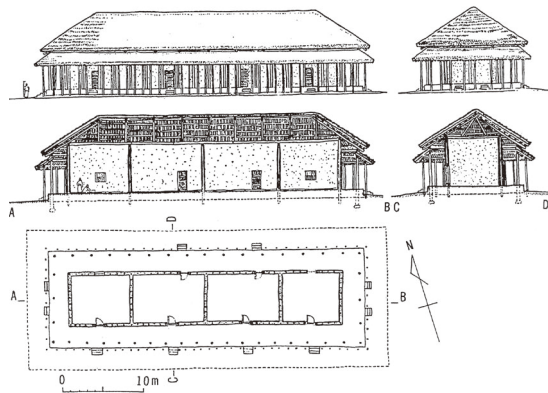


図28 湖北省盤龍城F1大型建築跡復元図



図29 北京故宮博物院蔵青銅器絵画

るし、独立棟持柱建物の役割もひとつに限定できない。しかし、先に分析した墓と独立棟持柱建物とのかかわりを念頭におけば、これら書物の記述を独立棟持柱建物にそのまま投影することはできないにしても、祖霊の祭りの場である寝あるいは宗廟に類する性格をこの建物に求めても、違和感はない。

二里头後期末ないし二里岡初期の河南省鄭州偃師殷故城遺跡や春秋時代の陝西省馬家莊3号建築跡、あるいは二里岡期の湖北省盤龍城F1の平面が日の字形をした大型建築跡(図28)は、甲骨文字や文献から宗廟とされている[飯島2003:196-198]。盤龍城F1などは約40×12mの500㎡近くの巨大な建造物である。宗廟がかくも大きな建物である理由は墓主の身分に応じたものでもあるが、そこで祖先に飲食物を捧げ、その靈魂を慰撫する目的があったからである[小南2001:67]。戦国時代の青銅器や漢代の画像石の多くには、大きな建物の中で飲酒が盛大におこなわれている儀礼の様子が描かれている(図29)。秦・漢時代の皇帝の主権の正当性は礼的秩序によって形成され、礼的秩序は祖先神の神前でおこなわれる共同飲酒の儀礼によって保たれた[西嶋1983:33-35]。

池上曾根遺跡など、中期後半の大型集落は多くの人口を擁していたであろう。この時期の独立棟持柱建物の巨大化と集落の肥大化と人口の増加が相関関係にあるとすれば、独立棟持柱の中に入るのも大人数であった可能性があり、そこで繰り広げられたのは祖先に飲食物を供じ、祖先とともにおこなう宴であったと考えてみてはどうだろうか。西周の酒宴の意味は、祭られる祖先を媒介として生きている人間同士の結びつきを強めることにあり[竹内2003:209]、共同体内での序列関係を正す飲酒儀礼の意義は、後漢の經学者鄭玄が記すように、それが日本列島に導入されたであろう漢代にも脈々と受け継がれている[小南2001:66]。近畿地方では実例に乏しいが、同じ性格をもつと考えられる北部九州地方の超大型掘立柱建物に共同飲食に用いたと考えられる儀礼的性格の土器が伴うことは、そのわずかな傍証である。

一方、独立棟持柱建物の絵画は、伝香川銅鐸に代表されるようにしばしば高床建物として描かれており、穀物倉庫としての機能を否定することはできない。池上曾根遺跡の独立棟持柱建物周辺からイネのプラントオパールが大量に検出され[秋山2007:416]、伊勢遺跡のSB5の柱穴から稲籾が出土した[近藤2006:26]のは、穀物倉庫の機能を裏付ける別の考古学的証拠である。しかし、そのことと宗廟的な性格とが互いに矛盾するものでないことは、前節で祖霊祭祀と穀霊祭祀が融即し

ている古代農耕儀礼のあり方を論じたように、もはや説明する必要はない。宗廟にはそもそも祖霊祭祀と絡んだ政治的性格があった。東南アジアの米倉は、部族の男子集会舎あるいは政治を議する会議所としての機能をもっている場合が少なくないのである [三品 1973 : 397-398]。

つまり、弥生時代の独立棟持柱建物、とくにまだ首長に独占されていない段階の A・B 類は、祖霊祭祀にかかわると同時に、穀物倉庫であり集会所であったという、多機能の性格をもっていた可能性が考えられる。

(3) 平原からホケノ山へ

共同体の祭りの場として大型独立棟持柱建物が機能していた段階には、祖霊祭祀の役割はあったとしてもまだそれは秘儀的色彩を帯びてはいなかった。しかし、B 類を経て C 類が確立してくる弥生後期、とくにその後半から終末を経て古墳時代になると、独立棟持柱建物は小型化して溝や柵に囲まれるなど、秘儀的色彩を帯びてくる。

『魏志』倭人伝によれば、卑弥呼は鬼道に通じていた。鬼道とは、祖先の霊を祀るシャマニズム的宗教行為であるとされる [山尾 1972 : 207]。卑弥呼は衆目の前には姿をみせず、秘儀をおこなっていたことも記されており、集落の中央における建物群の区画や、京都府向日市中海道遺跡や鳥取県羽合町長瀬高浜遺跡のような特殊建物の区画の形成とも通じた動向といえる。

山尾幸久は、中国では『晋書』武帝記泰始 2 年 (266) に、天を祀る南郊の円丘と地を祭る北郊の方丘を合体させるよう郊祀制度が改変されたとして、それが前方後円墳の起源になったことを論じたが [山尾 1972 : 149-156]、金子修一によって批判され [金子 1979 : 1533-1534] 撤回した。ホケノ山など前方後円形墳墓が 3 世紀前半にまでさかのぼることが判明した現在、266 年をその契機とするのは無理がある。しかし、後円部を天壇のように 3 段に築成し、遺体を北枕にし、水銀朱を多量に用い [都出 2005 : 340-354]、あるいは木槨を導入するなど、3 世紀の墳墓に郊祀制度や漢代墓制の影響を否定することはできない。

後漢末から三国時代初期にかけて、南郊を中心とする郊祀や一部の宗廟祭祀 (告祭) が一斉におこなわれるようになった。後漢末の分裂状態のなかで、郊祀・宗廟を中心とする皇帝祭祀が、有力者による政治的アピールとして積極的に活用されるようになるのである [金子 2006 : 204]。弥生後期終末における畿内地方の墳丘墓の出現契機をうかがわせる。

平原遺跡 1 号墓や西谷 3 号墓などの木槨墓、あるいはそれに類する施設と副葬品をもった首長墓に限って墓坑に上屋をもつ。これも居住域における首長の隔絶化と同様、祖霊祭祀が首長にまつわる個人的な祭祀として権威を帯びてきたことを物語る。吉備地方や丹後地方の墳墓の影響によって畿内地方に墳丘墓が導入され、槨をもつ墓坑をつくり、副葬品を多種納めるようになるのは 2 世紀終末～3 世紀初頭のことである。ようやくその段階に至り、北部九州の弥生中期後半と同じような王権形成への動きが畿内地方にも認められるようになった。こうした動きは、平原遺跡に導入された近畿地方の独立棟持柱建物が、今度は墓の施設として近畿地方へといわば逆輸入される、すなわち祖霊祭祀を墓でおこなうようになった 3 世紀前半のホケノ山墳丘墓の成立とも重なり合う⁽⁷⁾。

⑥……………成果と課題

おそらく、日本列島の本格的な農耕を営む地域では、『魏志』高句麗伝や韓伝に記されたような、祖先を中心とした農耕儀礼をおこなっていたのであろう。それは、中国に端を発した祖霊祭祀が、日本列島にも及んでいることを示している。ただ、その影響がよく現れているのは北部九州までである。

北部九州では、墓に伴う大型建物の出現は弥生中期初頭にさかのぼる。武末純一がいうように、これが中国の影響を受けたのであれば〔武末2001:106〕、楽浪郡設置のはるか以前、戦国時代にそれが及んだと考えざるを得ない。一直線上に墓と建物を配置するようになる中期後半に漢文化の影響を推測するのはよいが、それ以前における宗廟的性格の大型建物成立の契機については、自生説を含めて検討する必要がある。墓で祖霊祭祀をおこなう風習が希薄な近畿地方では、居住域に祖先の霊を招いて祭っており、南関東地方では中国の影響とは別に、縄文文化の伝統により墓でおこなっていた祖先の祭りを独立棟持柱建物が継承した。

その三者のありようは、独立棟持柱建物の種類の違いや系譜、墓とのかかわり合いなどからしても一様ではない。さらに、類型の変遷過程や規模の変化、相互交流や漢文化の影響の分析にもとづいて、独立棟持柱建物の性格の変化が共同体的な性格から首長の秘儀的性格へという流れのなかにあることを明らかにし、墳丘墓の形成や王権の形成と重なり合うことを論じた。

本稿のきっかけになったのは、広瀬和雄によって墓に伴う独立棟持柱建物が明らかにされたことによる。広瀬はそれを祖霊祭祀にかかわる建物と捉えたうえで、さらにカミが宿る神殿である、という自説を補強している。神観念の形成についてほとんど持論のない筆者にとって、結論としては広瀬から進んでいないどころかその前半の段階にとどまっている。しかし、類型化と変遷をあとづけての結論であったので、広瀬の前半の結論、すなわち独立棟持柱建物の役割のひとつは祖霊祭祀機能であった、という考えを補強する素材にはなったかと思う。

役割のひとつ、という意味は、独立棟持柱建物には並列した例もあるので、その機能が一つに限定できるかどうか、慎重に検討する必要があるからである。祖霊祭祀的役割を考えるのはよいとしても、次のような問題もある。漢代の宗廟制度では、宗廟には木主という祖先の霊が宿る位牌のようなものが置かれた〔金子1979:1500〕。独立棟持柱建物が漢文化の影響によって宗廟的性格を強めたとすれば、木主に類するものが必要になる。金関はそれを木偶に求めたが、春成の批判の対象になった〔春成1996:17〕。稲吉角田遺跡の土器絵画は、独立棟持柱建物ではないが、高床建物を含む2棟の建物の傍らに樹木を配し、枝に2つ何かを吊り下げた様子を描く。吊り下げられたものが銅鐸であるとの考えはすでに提示されており、この絵画が全体に祭儀にかかわる情景を描いたとする点も間違いないのであれば、常時建物に入れられていた銅鐸が、祭儀のときに取り出され、打ち鳴らされたとみるのも一案である。

弥生時代の掘立柱建物が集中する区域には、独立棟持柱建物のほかに、別の種類の掘立柱建物が伴う例が多い。祖先霊を祭る建物以外にも、あるいは天・地霊を祭る建物が存在していたかもしれない。別の角度からそれぞれの建物の役割を明らかにしていくこともまた、今後の課題である。

(2008年9月25日稿了)

謝辞

本稿を執筆するうえで、本研究会のメンバーの方々をはじめ、新井 努・飯島武次・石川岳彦・伊藤寿夫・伊庭 功・植田雄己・岡村 渉・蒲原宏行・川崎志乃・酒井清治・長尾宗史・中村 豊・豆谷和之の諸先生、諸氏のお世話になりました。記して感謝申し上げます。

註

(1)——本稿の結論とも関係することだが、この建物は、岩手県紫波町西田遺跡や秋田県鹿角市大湯遺跡のように、墓域において埋葬施設を取り巻くように建っている。この点からすると、弥生時代への継承を考えたいが、弥生時代最古の独立棟持柱建物のある近畿地方や東海地方の縄文晩期終末にこの種の建物構造が東日本から伝播しているのか否か、調べるができなかったので保留とせざるを得ない。ただ、独立棟持柱建物が近畿地方でⅣ期に盛行するのはⅢ期の南関東地方での形成に影響を受けたとする理解 [小林 2004 : 35] については、近畿地方に前期・中期初頭の実例があるので可能性に乏しい。

(2)——宮本長二郎は弥生時代の掘立柱建物の主流を占める高床建築では 20m 以上を大型とし [宮本 1991 : 40]、高倉洋彰は 40m 以上を大型、100m を超えるようなものを超大型としている [高倉 1994 : 2]。本稿では、独立棟持柱建物のデータにもとづいて区分した。図 23 をみると全体の分布では一つながりになっているが、時期ごとに分解すると、小・中・大の間に空白のあることがみて取れる。小型と中型の境界は、厳密には 22m である。

(3)——加茂遺跡や伊勢遺跡の方形区画の認定については、疑問を呈するむきもある [豆谷 2004 : 317-321]。

(4)——森岡秀人は縄文時代から古墳時代にかけての社

会進化を新進化主義学説も参照しつつ見通し、集団的共同労働によって建てられた超大型建物の存在している中期段階は、首長がまだ共同体を疎外するまでには至っていない部族制社会的段階であり、それを断ち切って首長制社会に移行するのが後期であるとする [森岡 2006 : 139-141]。近畿地方社会をそのようにみることに關しては、のちに述べる王権の形成と墳墓における祖霊祭祀の關係からしても賛成である。

(5)——そうすると、帥升の墓の可能性のある平原 1 号墓が伊都国にあり、伊都国は世々女王国すなわち邪馬台国に属するという『魏志』倭人伝の記述と、本州型独立棟持柱建物の動静が、邪馬台国の位置問題と關係をもってくるのだが、この点の考察はまた別の機会に譲りたい。

(6)——金関や春成、辰巳は八幡一郎のほこら = 穂倉説 [八幡 1978 : 47] を引用しつつ、描かれた穀倉がたんなる倉ではなくて、秋のイネの象徴 [春成 1991 : 67] であり、のちの王権儀礼において新嘗儀礼などを行うタカドノ [辰巳 1990 : 227-228] あるいは神の宿る場としての役割を見出している [金関 1985 : 72-73]。

(7)——ホケノ山墳丘墓の鏡もばらばらな状態で、木槨上の高い位置に置かれていた可能性が指摘されている [岡林 2001 : 40]。平原遺跡 1 号墓と通じるところがある。

参考文献

- 秋山浩三 2007 『弥生大形農耕集落の研究』青木書店。
- 足立克己編 1999 『姫原西遺跡 一般国道 9 号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告 1』建設省松江国道事務所・鳥根県教育委員会。
- 安藤広道 1996 「大型方形周溝墓から見た南関東の弥生時代中期社会」『みづほ』第 18 号, 48 ~ 57 頁, 大和弥生文化の会。
- 飯島武次 2003 『中国考古学概論』同成社。
- 池端清行 2000 『一般国道 23 号中勢道路 (9 工区) 建設事業に伴う長遺跡発掘調査報告』(『三重県埋蔵文化財調査報告』115-9) 三重県埋蔵文化財センター。
- 石川日出志 1999 「東日本弥生墓制の特質」『新 弥生紀行』175 ~ 176 頁, 朝日新聞社。
- 岩崎 茂 2002 「琵琶湖湖南の一素描 - 下長遺跡 - 古墳時代前期の情景 -」『平成 14 年秋季特別展 王の居館を探る』(『大阪府立弥生文化博物館図録』25) 44 ~ 49 頁, 大阪府立弥生文化博物館。

-
- 岩崎直也 1991「弥生時代の建物」『弥生時代の掘立柱建物－本編－』79～116頁，埋蔵文化財研究会。
- エルツ，R.（吉田禎吾・内藤莞爾・板橋作美訳）1980『右手の優越』垣内出版株式会社。
- 王 金林 1992『弥生文化と古代中国』学生社。
- 大阪府教育委員会 1987『府営八雲北住宅建替工事に伴う八雲遺跡発掘調査概要・I－守口市八雲北町所在－』。
- 大庭重信 2007「方形周溝墓の埋葬原理とその変遷－河内地域を中心に－」『考古学リーダー10 墓制から弥生社会を考える』53～70頁，六一書房。
- 岡崎雄二郎 2005「環壕内出土石板状石製品について」『田和山遺跡群発掘調査報告1 田和山遺跡』305～313頁，松江市教育委員会。
- 岡林孝作 2001「遺物の出土状況」『ホケノ山古墳調査概報』（『大和の前期古墳』IV）39～40頁，学生社。
- 岡田精司 1999「神社建築の源流」『考古学研究』第46巻第2号，36～52頁，考古学研究会。
- 甲斐昭光ほか 1996『神戸市西区玉津田中遺跡－第5分冊－』（『兵庫県文化財調査報告』第135-5冊）兵庫県教育委員会。
- 小田富士雄 1994「吉野ヶ里遺跡の源流と弥生社会」『日本の古代遺跡を掘る2 吉野ヶ里遺跡－「魏志倭人伝」の世界』131～206頁，読売新聞社。
- 及川良彦 2002「住居と掘立柱建物跡（関東）－関東地方の弥生時代集落の様相－」『静岡県考古学会シンポジウム資料集 静岡県における弥生時代集落の変遷』110～114頁，静岡県考古学会。
- 甲斐博幸ほか 1996『千葉県君津市常代遺跡群第1分冊』（『財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書』第112集）君津市常代土地区画整理組合・財団法人君津郡市文化財センター。
- 景山和雄・田中史郎 1985『大山池遺跡（上野辺地区）・大坪塚古墳発掘調査報告書』（『金岡町文化財調査報告書』第6集）鳥取県東伯郡金岡町教育委員会。
- 鹿児島県教育委員会 1985『王子遺跡』（『一般国道220号線鹿屋バイパスに伴う発掘調査報告書（I）鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』34）。
- 金関 恕 1982「神を招く鳥」『考古学論考 小林行雄博士古稀記念論文集』281～303頁，平凡社。
- 金関 恕 1985「弥生土器絵画における家屋の表現」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集，63～77頁，国立歴史民俗博物館。
- 金関 恕 1986「呪術と祭」『岩波講座日本考古学』4，269～308頁，岩波書店。
- 金関 恕 2001「弥生時代集落分析の視点」『弥生時代の集落』295～305頁，学生社。
- 金子修一 1979「魏晉より隋唐に至る郊祀・宗廟の制度について」『史学雑誌』第88編第10号，1498～1539頁，史学会。
- 金子修一 2006『中国古代皇帝祭祀の研究』岩波書店。
- 岸本道昭 1995『龍野市揖西町前地所在 養久山・前地遺跡－揖龍広域ごみ処理施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』龍野市教育委員会。
- 岸本道昭 1998「掘立柱建物からみた弥生集落と首長－兵庫県と周辺的事例から－」『考古学研究』第44巻第4号，79～91頁，考古学研究会。
- 岸本道昭・古本 寛 1997『南山古墳群 南山高屋遺跡－土師・南山土地区画整理事業南山土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』（『龍野市文化財調査報告』17）龍野市教育委員会。
- 木野本和之・川崎志乃 2000『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告IV』（『三重県埋蔵文化財調査報告』201）三重県埋蔵文化財センター。
- 黒田恭正・阿部敬生 1995「楠・荒田町遺跡第11次調査」『平成4年度神戸市埋蔵文化財年報』55～66頁，神戸市教育委員会文化財課。
- 高知県教育委員会 1986『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群第2分冊 本文II』。
- 高麗大学校発掘調査団編 1994『美沙里 第5巻』文化遺跡発掘調査報告，美沙里先史遺跡発掘調査団・京畿道公営開発事業団。
- 小林青樹 2003「縄文から弥生への祭祀と墓制の変容」『第4回大学合同考古学シンポジウム 縄文と弥生－多様な東アジア世界のなかで－』67～72頁，大学合同考古学シンポジウム実行委員会。
- 小林青樹 2004「弥生時代の祭場 東海以東」『季刊考古学』第86号，32～35頁，雄山閣。
- 小南一郎 2001「飲酒礼と裸礼」『京都大学人文科学研究所研究報告 中国の礼制と礼学』65～99頁，朋友書店。
- 近藤 広 2003「滋賀県（下之郷遺跡・伊勢遺跡・下鈎遺跡）」『日本考古学協会 2003年度滋賀大会研究発表資料』3～14頁，日本考古学協会 2003年度滋賀大会実行委員会。
- 近藤 広 2006「近江における弥生集落と大型建物」『日本考古学協会 2003年度滋賀大会シンポジウム1 弥生大型建
-

- 物とその展開』11～27頁，サンライズ出版株式会社。
- 佐伯英樹 2001 「下鈎遺跡の大型掘立柱建物」『埋蔵文化財シンポジウム邪馬台国時代の大型建物－下鈎遺跡，伊勢遺跡の謎に迫る－記録集』27～32頁，東栗町教育委員会・(財)東栗町文化体育振興事業団。
- 佐伯英樹編 2001 『埋蔵文化財シンポジウム 邪馬台国時代の大型建物－下鈎遺跡，伊勢遺跡の謎に迫る－記録集』栗東町教育委員会・(財)栗東文化体育振興事業団。
- 佐原 真 1996 「弥生時代に神殿はなかった」『弥生の環濠都市と巨大神殿－徹底討論池上曾根遺跡－池上曾根遺跡史跡指定20周年記念シンポジウム資料』8～9頁，池上曾根遺跡史跡指定20周年記念事業実行委員会。
- 三宮昌弘・川端 智編 1999 『尺度遺跡Ⅰ－南阪奈道路建設に伴う発掘調査－』(『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書』第44集)(財)大阪府文化財調査研究センター。
- 設楽博己 2004 「独立棟持柱をもつ大型掘立柱建物の性格」『情報祭祀考古』第25号，1～7頁，祭祀考古学会。
- 設楽博己 2008 『弥生再葬墓と社会』塙書房。
- 七田忠昭 1994 「吉野ヶ里遺跡の大型建物」『考古学ジャーナル』No.379，16～20頁，ニューサイエンス社。
- 七田忠昭 2003 「佐賀平野の弥生時代環濠区画と大型建物－吉野ヶ里遺跡を中心として－」『日本考古学協会2003年度滋賀大会研究発表資料』31～42頁，日本考古学協会2003年度滋賀大会実行委員会。
- 柴田昌児 1991 「西長峰遺跡」『弥生時代の掘立柱建物－資料(西日本・本州)編－』769～776頁，埋蔵文化財研究会。
- 清水真一 1997 「能登遺跡発掘調査報告」『桜井市埋蔵文化財1996年度発掘調査報告書Ⅰ』29～53頁，(財)桜井市文化財協会。
- 清水 尚ほか 1992 『針江北遺跡・針江川北遺跡(Ⅰ)一般国道161号線(高島バイパス)建設に伴う新旭町内遺跡発掘調査報告書Ⅳ』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会。
- 新東晃一ほか 1990 『一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書(Ⅲ)前畑遺跡(第6分冊)』(『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(52))鹿児島県教育委員会。
- 新堀哲編 2001 『川田・東原田遺跡』(『小笠町埋蔵文化財調査報告書』9)小笠町教育委員会。
- 菅原正明ほか 1996 「有鼻遺跡」『平成7年度年報』75～78頁，兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所。
- 鈴木敏則 2006 「東海・関東地方における大型建物・方形区画の出現と展開」『日本考古学協会2003年度滋賀大会シンポジウムⅠ 弥生大型建物とその展開』73～95頁，サンライズ出版株式会社。
- 高木暢亮 2003 『北部九州における弥生時代墓制の研究』(財)九州大学出版会。
- 高久健二 2001 「三韓の墳墓」『東アジアと日本の考古学Ⅰ 墓制①』33～62頁，同成社。
- 高倉洋彰 1994 「弥生時代の大型掘立柱建物」『考古学ジャーナル』No.379，2～3頁，ニューサイエンス社。
- 竹内照夫 1977 『礼記 中』(『新釈漢文大系』28)明治書院。
- 竹内康浩 2003 「西周」『世界歴史大系 中国史Ⅰ－先史～後漢－』163～219頁，山川出版社。
- 武末純一 2001 「北部九州の弥生集落」『弥生時代の集落』102～117頁，学生社。
- 武谷和彦・岡毅 1999 『平林遺跡Ⅰ区』(『北茂安町文化財調査報告書』第8集)北茂安町教育委員会。
- 辰巳和弘 1990 『高殿の古代学－豪族の居館と王権祭儀』白水社。
- 田中清美 1997 「弥生時代の木槨と系譜」『堅田直先生古希記念論文集』109～127頁，真陽社。
- 辻 信広ほか編 1999 『茶畑山遺跡(本文編)』(『名和町埋蔵文化財発掘調査報告書』第24集)名和町教育委員会。
- 都出比呂志 2000 『王陵の考古学』(『岩波新書(新赤版)』676)岩波書店。
- 都出比呂志 2005 『前方後円墳と社会』塙書房。
- 寺崎裕助ほか 1977 『埋蔵文化財調査報告書 藤橋遺跡・尾立遺跡・旧富岡農学校跡遺跡』長岡市藤橋遺跡等発掘調査委員会。
- 寺沢 薫 1990 「青銅器の副葬と王墓の形成－北九州と近畿にみる階級形成の特質(Ⅰ)－」『古代学研究』第121号，1～35頁，古代学研究会。
- 傳 熹年 1980 「戦国中山王魯墓出土的《兆域図》及其陵园規制的研究」『考古学報』1980年第1期，97～138頁，科学出版社。
- 戸田哲也 1999 「東日本弥生農耕成立期の集落－神奈川中里遺跡」『季刊考古学』第67号，87～90頁，雄山閣。
- 富田逸郎 1991 「上野原遺跡」『弥生時代の掘立柱建物－資料(西日本・九州，四国)編－』38～39頁，埋蔵文化財研究会。
- 永井宏幸編 2001 『志賀公園遺跡』(『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書』第90集)財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター。
- 長野真一 1988 「鹿児島県上野原遺跡」『日本考古学年報39(1986年度版)』609～613頁，日本考古学協会。

-
- 中村和美・池畑耕一 2003『上野原遺跡第2～7地点：弥生時代から近世編（第6分冊）』（『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』52）鹿児島県立埋蔵文化財センター。
- 中村健二ほか 2001『中兵庫遺跡－一般県道単独改良山田・草津線工事に伴う埋蔵文化財調査報告－（本文編）』滋賀県教育委員会事務局文化財保護課・財団法人滋賀県文化財保護協会。
- 西川 徹編 2004『茶畑遺跡群茶畑第1遺跡』（『鳥取県教育文化財団調査報告書』93）財団法人鳥取県教育文化財団・国土交通省倉吉河川国道事務所。
- 西嶋定生 1983『中国古代国家と東アジア世界』東京大学出版会。
- 禰宜田佳男 2000「生産経済民の副葬行為 弥生文化」『季刊考古学』70, 38～42頁, 雄山閣。
- 橋詰佳治ほか 1987『寺田・日野1－一般国道156号岐阜東バイパス建設に伴う緊急発掘調査』（『岐阜市文化財報告』1987-1）岐阜市教育委員会。
- 濱田竜彦 2006「伯耆地方における弥生時代中期から古墳時代前期の集落構造」『日本考古学協会2003年度滋賀大会シンポジウム1 弥生大型建物とその展開』29～53頁, サンライズ出版株式会社。
- 原田大六 1991『平原弥生古墳 大日靈貴の墓』葦書房有限会社, 下巻。
- 春成秀爾 1987「銅鐸のまつり」『国立歴史民俗博物館研究報告』第12集, 1～38頁, 国立歴史民俗博物館。
- 春成秀爾 1991「描かれた建物」『弥生時代の掘立柱建物－本編－』55～69頁, 埋蔵文化財研究会第29回研究集会実行委員会。
- 春成秀爾 1996「弥生時代の祭り」『弥生の環濠都市と巨大神殿－徹底討論池上曾根遺跡－池上曾根遺跡史跡指定20周年記念シンポジウム資料』16～17頁, 池上曾根遺跡史跡指定20周年記念事業実行委員会。
- 半澤幹雄・三輪晃三 1999「武庫之庄遺跡」『平成8年度国庫補助事業 尼崎市内遺跡復旧・復興事業に伴う発掘調査概要報告書』47～86頁, 尼崎市教育委員会。
- 伴野幸一 2001『下長遺跡発掘調査報告書Ⅸ 守山市文化財調査報告書』守山市教育委員会。
- 樋上 昇 2004「一色青海遺跡」『年報 平成15年度』9-13, (財)愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター。
- 樋口隆康ほか 2001『ホケノ山古墳調査概報』（『大和の前期古墳』Ⅳ）学生社。
- 広瀬和雄 1996「神殿と農耕祭祀－弥生宗教の成立と変遷－」『池上曾根遺跡史跡指定20周年記念 弥生の環濠都市と巨大神殿』110～123頁, 池上曾根遺跡史跡指定20周年記念事業実行委員会。
- 広瀬和雄 2008「弥生墳墓と神殿－前方後円墳祭祀と弥生墳墓祭祀－」『国士館考古学』第4号, 1～19頁, 国士館大学考古学会。
- 福田義彦 1989『立野遺跡・村徳永遺跡（C地区）』（『佐賀市文化財調査報告書』第24集）佐賀市教育委員会。
- 星田享二 1976「東日本弥生時代初頭の土器と墓制－再葬墓の研究－」『史館』第7号, 10～52頁, 弘文社。
- 穂積裕昌・角正淳子編 2005『菟上遺跡発掘調査報告－本文編－』（『三重県埋蔵文化財調査報告』227-7）三重県埋蔵文化財センター。
- 前田光雄・坂本裕一 2006「弥生時代の遺構」『田村遺跡群Ⅱ 高知空港再拡張整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第9分冊 総論』49～96頁, 高知県教育委員会・(財)高知県文化財埋蔵文化財センター。
- 松本信廣 1922「社稷の研究」『史学』第2巻第1号, 111～130頁, 三田史学会。
- 豆谷和之 2000「唐古・鍵遺跡第74次調査－大型掘立柱建物の検出－」『日本考古学』第10号, 107～115頁, 日本考古学協会。
- 豆谷和之 2004「『宮室』異論」『海峽の地域史－水島稔夫追悼集－』312～322頁, 水島稔夫追悼集刊行会事務局。
- 丸山雄二編 1996『大塚遺跡Ⅱ－弥生時代後期から古墳時代の集落遺跡の調査－』（『長浜市埋蔵文化財調査資料』第14集）長浜市教育委員会。
- 三重県埋蔵文化財センター 2005『村竹コノ遺跡（第3次）発掘調査現地説明会資料2』。
- 三品彰英 1973『古代祭政と穀霊信仰』（『三品彰英論文集』第5巻）平凡社。
- 水谷 豊・浅尾 太・川崎志乃 2007『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報18』三重県埋蔵文化財センター。
- 溝口孝司 1995「福岡県甘木市栗山遺跡C群墓域の研究－北部九州弥生時代中期後半墓地の一例の社会考古学的研究－」『日本考古学』第2号, 69～94頁, 日本考古学協会。
- 宮崎幹也 1994『黒田遺跡3』（『近江町文化財調査報告書』第17集）近江町教育委員会。
- 宮本長二郎 1991「弥生・古墳時代の掘立柱建物」『弥生時代の掘立柱建物－本編－』33～54頁, 埋蔵文化財研究会第29回研究集会実行委員会。
- 宮本長二郎 1998「掘立柱建物の出現と展開」『先史日本の住居とその周辺』261～272頁, 同成社。
-

- 村上恭通 2000 「鉄と社会変革をめぐる諸問題－弥生時代から古墳時代への移行に関連して－」『古墳時代像を見直す－成立過程と社会変革－』137～200頁，青木書店。
- 森井貞雄ほか 2007 『上の山遺跡Ⅱ 一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（『財』大阪文化財センター調査報告書』第155集）財団法人大阪府文化財センター。
- 森岡秀人 2006 「大型建物と方形区画の動きからみた近畿の様相」『日本考古学協会 2003 年度滋賀大会シンポジウム1 弥生大型建物とその展開』115～144頁，サンライズ出版株式会社。
- 森下英治 2001 「旧練兵場遺跡の集落構造－これまでの発掘調査成果から－」『旧練兵場遺跡 市営西仙遊町住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書付編 旧練兵場遺跡シンポジウムの記録』23～38頁，普通寺市・（財）元興寺文化財研究所。
- 山尾幸久 1972 『魏志倭人伝』講談社。
- 山田洋一郎 1991 「下大五郎遺跡」『弥生時代の掘立柱建物－資料（西日本・九州，四国）編－』68～70頁，埋蔵文化財研究会。
- 八幡一郎 1978 『稲倉考』（『考古民俗叢書』16）慶友社。
- 湯浅利彦・菅原康夫 1993 『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告3 桜ノ岡遺跡（Ⅰ）桜ノ岡遺跡（Ⅲ）』（『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書』第3集）徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター・日本道路公団。
- 湯村 功ほか 2007 『鳥取県東伯郡琴浦町 梅田萱峯遺跡Ⅱ』（『鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書』16）鳥取県埋蔵文化財センター。
- 楊 寛（西嶋定生監訳）1981 『中国皇帝陵の起源と変遷』学生社。
- 吉田 稔ほか 2003 『熊谷市北鳥遺跡Ⅵ 熊谷スポーツ文化公園建設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』（『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書』第286集）埼玉県・財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 第2分冊。
- 和田 萃 1969 「墳の基礎的考察」『史林』第52巻第5号，646～704頁，史学研究会。

挿図出典

- 図1・20 = 設楽 2004 : 2
- 図8 = 秋山 2007 : 374
- 図10・13 = 濱田 2006 : 33・34
- 図11・15・16 = 近藤 2006 : 16・21
- 図21・22 = 広瀬 2008 : 3・7
- 図23・24 = 設楽作成
- 図25 - 1 = 清水眞一 1996 「芝遺跡第20次調査出土の絵画土器」『みずほ』第19号，39～41頁，大和弥生文化の会 : 41。
- 図25 - 2 = 秋山浩三・小林和美・仲原和之・山崎頼人 1997 「特殊表現をもつ弥生建物絵画－池上曾根遺跡の新出資料速報－」『みずほ』第23号，30～41頁，大和弥生文化の会 : 32。
- 図27 = 七田 2003 : 61
- 図28 = 飯島 2003 : 198
- 図29 = 小南 2001 : 90，それ以外の挿図は，表1の各遺跡データの出典による。

（駒澤大学文学部，国立歴史民俗博物館共同研究員）
（2008年10月31日受理，2008年12月5日審査終了）

Buildings with Freestanding Munamochibashira and Ancestor Ritual

SHITARA Hiromi

In buildings with freestanding munamochibashira (gable end ridge-bearing pillars), the munamochibashira supporting the ridge in the center of the roof are hottatebashira (earthfast posts) situated some distance from the gable side. Up until Middle Yayoi, these buildings were communal in character, but in late Yayoi and the beginning of the Kofun period they were enclosed by trenches or walls, had a secretive aspect and were used exclusively by chiefs. Based on special decorations of these buildings in pictures incised on Yayoi pottery as well as relics excavated from post holes, it would appear that this type of building served as a shrine.

Since in northern Kyushu large buildings where ancestors were worshipped were found along with burial precincts in early Middle Yayoi, we know that from early on rites for the spirits of ancestors were held in these large buildings adjoining cemeteries. In the No.1 tomb at the Hirabaru Site in Fukuoka Prefecture there is a building for ancestor ritual with freestanding munamochibashira on top of the burial chamber. Since the building is in the Honshu and Shikoku style, it follows that it was introduced from the Kinki region. We may assume, therefore, that buildings with freestanding munamochibashira in the Kinki region were used for ancestor ritual.

However, this type of building found in the Kinki region is not found alongside burial precincts. In this region, people worshipped their ancestors in buildings with freestanding munamochibashira located within inhabited zones. Nonetheless, at the Mount Hokeno tumulus in Nara Prefecture dating from the end of Late Yayoi, there is a building with freestanding munamochibashira on top of a burial chamber, which was introduced from northern Kyushu at the time of the establishment of imperial authority in the Kinai region. In southern Kanto this type of building also performed a similar role, although it inherited local traditions. Although buildings with freestanding munamochibashira have the role of ancestor ritual in common, their development differed in each of the three regions.

Key words : Yayoi period, Settlement, Freestanding Munamochibashira, Rectangular shaped tomb, Ancestor ritual, Han dynasty culture
